

---

# らき すた オレと愉快的仲間たち～旅立ちの日へ～

ME-GA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

らき すた オレと愉快的仲間たち旅立ちの日へ

### 【Nコード】

N2575P

### 【作者名】

ME-GA

### 【あらすじ】

少年は一人だった……。

そんな孤独の少年、倉場かいとを救ったのは4人の少女だった。

『かいと君は一人じゃないよ』

『もう、そんな悲しいこと言わないでよ!』

『ありがとう、かいと君』

『頼りにしていますよ? かいとさん』

『みんな、ありがとう……!!』

『らきすた オレと愉快的仲間たち』 衝撃のリメイク版！  
新キャラ、新イベントを加えて再始動！！

タイトル変更しました

## 取扱説明書：この作品について（前書き）

諸注意：

私の小説、

『らきすた オレと愉快的仲間たち』は私の初めての小説であったため、

至らぬ部分が多岐ありました。

というわけで、

リメイクヴァージョンとして新シナリオを加えて新規連載とさせていただきます。

## 取扱説明書：この作品について

この作品を読むにあたって：

### 【用意するもの】

- ・寛大な心
- ・原作愛
- ・PCのバッテリー 適量（ノートPCの場合）

### 【読む手順】

- ？ ・読みたいページを開きます。
- ？ ・読みます。
- ？ ・？へ戻る

### 【注意！】

- ・目に入ると危険です。適度な休憩を挟んでください。
- ・お子様の手の届かない所に保管してください。
- ・家族や友人に見せることはあまりおすすめできません。
- ・『過度な期待』をPCの近くに置かないでください。爆発する恐れがあります。（作者が）
- ・必ず換気をしてください。

以上の注意を守らず、

「最近、親とか友達の視線が冷たいんだよな。アイツのせいだよ」  
なんてことになっても作者は一切責任は負いません。

## 始まりの出会い

高校に通い始めて3回目の春が来た。

オレは今年で3年生、高校最後の年なのだ。

だからと言って思い出づくりに友達と沢山遊んだりとかするつもりは毛頭無い。

第一、友達なんていないしな。

別に難関大学に合格するために遊ぶ暇もなく勉強してたとか、脇目もふらず部活やスポーツに打ち込んでたわけでもない。

いないんじゃない。いないんだ。

そんなどうでもいい話を聞かされるよりは空でも見てた方がいい。もしくはネットだな。

余計な意識はしないでいい分、気楽だ。

なら、どうして学校に通っているかというと、

祖母が原因だ。

育ての親である祖母は何かとオレを可愛がった。そして小さい頃から色々なことをオレに教えた。

その大半は既にオレの脳内には残っていないが、どうでもいいことばかり記憶している。  
あとは察してくれ。

そんなわけで学校に通ったはいいがほとんど意味のない3年が過ぎようとしていたわけだ。

教室に入ると予想通り、生徒達は騒ぎ立てている。

教師のいない教室はほとんど生徒のものだからこうなるのも無理はない。

だが、それはオレにとって騒音以外の何でもないし、オレは顔をしかめつつ自分の席へ着き、鞆から本を取り出した。

遅刻ギリギリの教師、黒井……だっけ？ は始業式へ遅れずに行くことを告げた後、ボタンと教卓に突っ伏して動かなくなった。

解散する雰囲気が出たため、オレも椅子から立ち上がり講堂へと向かう。

何気なくオレの視界に入ったのは一人の女生徒が落としたカード。

テレカぐらいの大きさのもの。

でかかかと印刷されているのは何故か『ミルビーム』発射のポーズをとった『長』。

（原作読んでるのか……？）

オタクで悪いか。

製造者を少し疑いつつも落とした女生徒を追う。

特徴のありすぎる姿だったからか、落とし主はすぐに見つかった。

腰まである青髪にピヨンと飛び出たアホ毛……は人のこと言えんが。そして何より背が低い。小学生か？

「……おい、アンタ。さつきこれ落としたぞ」

女生徒はカードを確認すると餌を与えられた猫みたいに瞳を輝かせた。

「お、おおー！ ありがとー、長門の恩人さん！」

「ちょ、伏せてねーし」

明らかにの位置おかしいだろ。

「ま、そういうことだ。次は落とすなよ？」

「あ、そーだ。後で一緒にごはん食べよーよ。お礼も考えなくちゃ」

「いや、別」……」

説明しよう

祖母に幼い頃から叩き込まれたことがあった。

それは

『女の子の願いはまず聞いてあげること』  
だった。

オレはただ……

「あ、……わ、分かった……」

と、言うしかなかったのだ。



オレの運命はここから大きく、

動き始めた。

## 運命を変える話 前編

始業式も終わり、なんやかんやで昼休み。（なんやかんやには突っ込まないでくれ）

ちっさいの……名前は“泉こなた”。

オレは泉に昼食を共にすることになんやかんやで丸め込まれてしまったわけだが。

「昼飯忘れた……」

そう。

朝、盛りつけた後にテーブルの上に置いてそのまま放置してしまったワケだ。

もちろん弁当のつもりだったから金なんて無い。

「しゃーねえ。昼食は断って……って何が『しゃーねえ』なんだ……」

最初っから一緒に昼飯なんて乗り気じゃなかったんだし行かなくてラッキーじゃないか。

なーんて思っていたが……

「やつほ。屋上行こ」

「や、悪いな。弁当忘れたんだ。だから昼飯h……」

「あゝ。じゃあ私の分けてあげるよ。みんなも話聞けば分けてくれるって」

玉砕。

当たって砕けました。

オレは泉に屋上へと連行された。

オレをかこむ4人の女子。

いやー、女生徒っていいなあ……

「じゃ、ね                      だろうがああ！！！！！！」

「うおつ！    いきなり叫んでどしたん？」

「……なんでも。自分の不甲斐なさを嘆いただけだ」

泉にツインテつり目の紫髪の生徒、リボンたれ目の紫髪に眼鏡巨乳の桃髪。

さつき見た泉以外のだいたいの特徴はこんな感じだ。

「かくかくしかじか、というわけで長門の恩人の倉場かいと君だよ」

「ちよつと待て。何故オレの名前を知っている？」

「だって同じクラスだし」

「ていうかアンタ強引に連れてきたんじゃないでしょうね……」  
ツインテの方はじと目で泉を見ていた。

「だいじょーぶ。快く了承してくれたから」

「好きで来たワケじゃないが……」

「だから人様に迷惑かけるなっていったらどうが……！」  
ツインテは泉にすかさずチョップをお見舞いした。

痛そーだな、アレは。

「ま、まあとにかくお弁当忘れて困ってたんデシヨ？」

泉は涙目で頭を押さえながらそう言ってきた。

まあ実際そうなんだけど。

泉は自分の弁当のフタに適当におかずを盛り、オレに渡した。

「はい。ちゃんと割りばしも付けてあげたから」

「……悪い」

盛られている量は少ないが文句を言える立場じゃない。

有り難く頂戴し、手を付けようとする。が、

「はい」

「いいのか？ えっと……」

「“かがみ”よ。柊かがみ」

「悪いな、柊」

柊は弁当からいくつかのおかずをオレの皿に乗せた。

「じゃあ、私のもあげる」

そう言つてリボンのヤツもおかずに乗せた。

「お前は……」

「私は“柊つかさ”だよ？」

「柊……？」

「うん。お姉ちゃんとは姉妹なんだ」

お姉ちゃんてことはこっちが妹か。

ややこしいな。

「私のも差し上げます。お口に合えばよろしいのですが……」

「えっと……お前は？」

「“高良みゆき”と申します。以後よろしく願いしますね」

「あ、ああ……」

と、そんな感じでそいつ等から貰った弁当はすっかり一人前の弁当になった。

とりあえず、オレは目についた卵焼きに手を付けた。

「……うまい」

「おゝ、ホント？ いやゝ作った甲斐があったヨ！」

泉はそう言つてバシバシとオレの肩を叩く。

……意外と痛いんだが。

寄せ集め弁当もすっかり無くなり、オレは立ち上がる。

「悪いな。ご馳走様」

「むう」。倉場君たら冷たいんだから！」

お前に言われる筋合いはねえよ。

オレの勝手だろ。

「せっかく女の子がこないっぺんに話しかけてるんだから」。ちよつとしたプチハーレムじゃん？」

「生憎だがオレはハーレムを築くような優男じゃない」

オレの学ランの端を掴んでいる泉の手を払い、さつさと退散する。

かいと

たたかう

まほう

アイテム

逃げる (ピッ)

『かいとは逃げ出した！』

『しかし回り込まれてしまった！！』

なんて阿呆な展開は置いておいて。

泉はすばやく屋上の扉の前に立ち、オレの行く手を阻む。

「……おい。いい加減にしないとぶちのめしt……」

## 祖母の教え 第二十七条

『女の子には優しくすべし。暴力なんて以ての外』

オレの拳は泉に当たることなく空を切る。

泉は不思議そうな顔でコツチを見ている。コツチミンナ

「どうしたの……？」

「いや。自分の不甲斐なさ（以下略）」

「さっさ。早く戻ろう」

オレは泉に文字通り背中を押されさっきの弁当を食った場所へ連れ戻された。

## 運命を変える話 前編（後書き）

さーて次回のらき すたは？

かいとです。

まったく、アイツらオレに絡んできてもいいことねえってのに……。

次回、

「運命を変える話 後編」

## 運命を変える話 後編

いつもの昼休みよりも余分な体力を使った地獄の時間も過ぎ、下校時間。

オレはさっさと自分の荷物を鞆に詰め、教室を出る。

ハズだったんだがな。

「そりゃっ」

「!?!」

オレの足に泉の足が引っかけられ、オレは盛大にすっ転ぶ。

「何すんだよ!」

「いやゝ。倉場君何も言わないでさっさと帰る準備してたから止めるには最高のやり方かと」

「こんだけ非人道的なコトしといて何言ってやがる!?!」

「ムズカシイ日本語ヨク分カラナイ」

……コイツむかつく。

オレは泉のアホ毛をがっしりと掴んだ。

「おい、いい加減にしねえとこのアイデンティティ引っこ抜くぞ?」

「ちょ、マジ勘弁!!」

流石にこれは痛そうだったから取り止め。

「いいか。これに懲りたらオレに関わるのは止める」

「腐腐腐。私のしつこさは油污れよりもひどいよ?」

「じゃあ、泡で落とすわ」

オレは何故か水道の所に置いてあった泡のチ　ラを盛大に泡立たせ泉の頭をわしゃわしゃといじる。

「ちょおお!　何すんの!?!」



「お客様ー、かゆい所はございませんかー？」

と、微妙に長いミニコントは終了。

軌道修正。

「とにかく、もうオレに関わるな！」

「えー、いいじゃん」

「ええい！ 放せ！」

オレは掴みかかってきた泉を振り払い、下駄箱へと向かった。

「はぁ……。今日は無駄に疲れたな……」

パカッと下駄箱の扉を開き、靴を……。取り出せません。

何故かって？

そこに靴がないからさー！！

……流石にオレでも靴を履かないで家を出るといふ愚行は犯しちゃいないさ。

.....

( 〃 〃 ・ ) ニマニマ

( 。 。 ) コツチミンナ！

そんな泉の手にはオレの靴が。

「……」  
「……」

どっちから動いたんだろうか。  
オレも泉も猛ダッシュで鬼ごっこ。

そんな感じが5分。

3-C前に差し掛かった。

「あ、こなたー。帰るわよ」

柊姉……だっけ？

が泉に向かって手を振っている。

泉はその下をひょいとくぐり抜ける。

もちろんそれは泉が小さいからできることであってオレにはそこまでの素早さはありません。

「げふっ!!」

「!？」

柊姉がオレの首にラリアットを入れる形になった。

「~~~~~!!」

首を押さえて悶絶。

「えっと、なんか……ゴメンね？」

「いい……気にすんな……」

まだ痛む首を押さえて立ち上がる。

とにかくこれ以上体力を使うのは無謀と考え踵を帰して家に

帰れません。靴が無いんだった。

って

「元はと言えば泉のせいだろーがぁ！」  
ビシッ、と泉を指さす。

「ん〜。でも追いつけなかった倉場君も悪いよねえ？」

……そう言われるとそうです。

「だから人に迷惑をかけるな!!」

この事件は柊姉の鉄拳により収拾がついた。

「ホンつつつと〜にゴメン!!」

「あー、もういいって」

もう何度目か分からない柊姉の謝罪を受け流しつつも歩く。

さっきのラリアットの詫びにオレになんか奢るらしい。

オレとしては早く解放してほしかったが、ここでも祖母の教えが生きてしまった。

マクド ルド

値段や満足感からここに決まり、俺たちは店内へ。

オレはチーズバーガーとマツ シェイクを奢って貰った。

コイツらと食事というのは気にくわなかったが今夜の食費が浮くの

は嬉しい事だ。

親戚たちの援助で家計を支えているが流石にそれも多くない。  
そう考えればこういうのはいいかもな。

とりあえず席について早速チーズバーガーにかぶりつく。  
外食って久しぶりだな。

半分くらい食ったとき、オレは自分へ向く4つの生暖かい視線に気付く。

「……………なんだ？」

「いやゝ。倉場君ですごい幸せそうに食べるなゝ、って思ってた」

「そうね。お昼の時もそうだったかも」

「うんうん。見てるとすごく嬉しそうだもん」

「そうですね。食物に対して感謝して食べている感じです」

「そうか……………」

幸せ、か…………。

そんなものずっと前に忘れちゃったな…………。

でも、幸せはこんなものだったかも、と

少しだけ、覚えている…………。

## 運命を変える話 後編（後書き）

さーて次回のらき すたは？

こなたです。

むむう、倉場君はなかなかムズカシイ人みたいだねえ。攻略も大変だよ……。

次回、

「思いも寄らない展開」

## 思いも寄らない展開

「ただいま……」

なんて柄にもなく言ってみる。

返事なんてあるはずがない。

誰もいないのだから。

そもそもオレが祖母の元で育ったのだって、

両親の死が原因だ。

幼かったオレは事故の後、間もなく祖母に引き取られた。

だったろうか？

まあ、そんな昔のことはどうでもいいけどな。

適当に鞆を放り投げて着替えを取り出し、風呂へ直行する。

しばらくおまちください……。

「あゝすつきり」

風呂はいいな。

こついうときは風呂上がりの牛乳でも飲んで更にすつきり……

「……ない」

そうだ。

今日、夕飯の材料と一緒に買おうと思ってたんだ。  
でも今日はアイツらがいたから忘れて帰って……。

オレは何となく諦めきれなくてコンビニへと向かった。

コンビニって結構高いんだよな。  
スーパーだったら凄く安いのに。

なんて思っているとオレの視界の端になんか店先でおろおろしている少女が。

オレはしばらく迷ったが結局は祖母の教えがオレの意志よりも勝つてしまい、しかたなく話しかける。

「おい」

「ひゃう!？」

「って、スマン。驚かせたな……」

「い、いいえ。私が勝手に吃驚しちゃっただけで……」

見たところ小学生ぐらいの少女だ。

コンビニのレジ袋を持っている所を見るとたぶんオレと同じ心情だろう。

「どうした？ 家が分かんなくなっただか？」

「うう、実はそうなんです……。引越してきたばかりで」

「そうか……。オレもお前の家を知つてれば送るんだけどな……」

「そんな！ 悪いですし、お姉ちゃんに電話して迎えに来て貰おうかなって思ってたんです！」

「だけどなあ……」

いくら何でもこんな遅い時間に女の子が一人つてのもな。

「お前、家の住所とかは分かってるのか？」

「はい……一応」

「何処？」





「それじゃあこの人がお姉ちゃんが言ってた人なんだね。それならお礼もしやすいね」

「お礼ってゆーちゃん、どうかしたの？」

「うん。家が分からなくて倉場さんに送ってもらったんだ」

「ちょ、あんま余計なこと言っな！！」

「へえ（＝．＝）」

「ちょ！ ほら、あの顔しやがった！！」

その後、オレは泉家へ強制連行。

「おじやまします……」

オレも他人の家にずかずかと上がるような嫌なヤツじゃないさ……。来たくて来たワケじゃないけどな！！（ここ重要）

「いやあ。倉場君にもそんな一面があっただねえ」

「なんだよ」

オレは出されたお茶を人囃り。

「まさかゆーちゃんみたいな娘を軟派しようなんてさ（＝．＝）」

「ぶっ！」

しまった！ 泉のヤツ、よりもよってそんな思考に行き着きやつた！！

「違う！ 断じて違う！！」

「あゝハイハイ」

「信じてねえ！！」

なんてことだ……。

オレはこんなヤツに生まれて初めて弱みを……

握られてしまった……。

## 思いも寄らない展開（後書き）

さーて次回のらき すたは？

かがみです。

なーんか昨日と今日でこなたと倉場君の距離感近くなってない？

次回、

「握られた弱みとアホ毛」

## 握られた弱みとアホ毛

「もう朝か……」

結局、昨夜はなかなか泉家から帰ることができずオレが自宅に着いたのは12時をとくに過ぎたところだった。

「ほらほら。さっさと顔を洗ってごはん食べなよ」

「あゝはいはい」

促され、洗面所で顔を洗う。

やっぱり目覚めるな。

テーブルの上にはご飯にみそ汁に焼き魚と典型的な朝食が並んでいた。

「お、美味そうだな」

「まあね、気合い入れて作ったからね」

「じゃ、いただきます」

「いただきます」

オレは違和感に気付き、目の前のアホ毛をがっしりと掴んだ。

「何してんだお前」

「いやあ、今日試しに来てみたらドア開いててさ」

泥棒とか来なくてよかった……なんて思考はどうでもよくてとりあえず目の前の問題だ。

「だからってお前はドアが開いてたら不法侵入するのが当たり前なのか……？」

だんだんとアホ毛を握る力を強めていく。

「いや、友達の家鍵が開いてたら心配するでしょ？ 強盗とか入ったと思って」

「お前に心配される言われはない」

「せつかく朝ご飯も作ってあげたのに」

「いらねえよ！」

まあ、ちゃっかり頂いたんですけどね。

朝飯も終わり、学校へ行く。

いつもと違うのはオレの横に着いてくるチビだ。

「だ　！　いい加減離れろって！！」

「えゝいいじゃん」

「よくねえ！」

まったく……大体何でコイツは俺の家を知ってるんだ……。

なんてことを思案していたらオレの乗車する電車が来た。

「あ」

「げえ」

「おつはよゝ、かがみ、つかさ」

「おつす、こなた」

「おはよゝこなちゃん」

柊姉に妹。

なんてこった。泉だけでも対応がいつぱいいつぱいなのに更にコイツらまで加わるとは……。

「おはよ、倉場君」

「倉場君もおはよう」

「……ああ、おはよう……」

オレは力なく返事を返し空いていた席に座る。

「随分お疲れね、何かあった？」

「別に……」

「倉場君は昨日は深夜アニメ見てたんだよね？」

「いや、疲れて見る気力もなかった……」

その時、かがみとつかさは（見てるのか……）と思った。

教室に入ると高良が挨拶をしてきた。

オレは適当に返し、さっさと席に着く。

「ねえねえ倉場君」

「何だよ……」

「今日の昼休みは暇？」

「暇じゃねえ」

「どうせまた本読むんでしょ？」

「そうだけど？」

「じゃあ一緒にお昼ご飯食べよう！ いいよね？ 答えは聞いてない」

「ちょ、聞けよ！」

かがみ side

朝、教室に入るなりこなたは倉場君に話しかけに行った。

ていうか朝も一緒に登校してきたような……？

それに倉場君も昨日とくらべて滅茶苦茶馴染んでるし……。

やっぱり何かあったのかしら？

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「え？ いや、こなたと倉場君が急に仲良くなったな……って思ってた……」

私がそう言つとつかさとみゆきもそつちを見てうんうん頷いている。

「確かに」

「仲がいいことはよいことですな」

「まあ、そうなんだけどさ……」

だからといってあの一匹狼のような気を出していた倉場君が一日で馴染むとは思えない。

なにかあったのかしら……？

かいと side

結局あのあともしつこく迫られ、昼食と一緒に食べるようになった。今日は教室の一角で食べるようになったらしい。

ちなみにオレの弁当は今朝に泉が用意していた（オレの家で）弁当だ。

まったく、勝手に人の家に上がってなにしてんだ……。

でも、泉は料理が上手いみたいだな。

現にこの弁当もほとんど手作りらしいな。

そんな泉手製弁当を見て柊姉は感嘆の声を上げる。

「へえ、アンタって料理できるのね。意外だわ」

「少しくらいはできるな。まあ、これはオレじゃなくて泉が作ったんだけど」

「……」

なんでコイツら一斉に黙り込むんだ？

「こゝな〜た〜？」

「な、なんデシヨ、かがみサン？」

「さてはアンタ……勝手に押し入ったんじゃないでしょうねえ……？」

「そ、ソナナワケ……ナイデスヨ？」

「ホントかしら？」

柊姉はちらりとオレを見る。

どうやら返事を待っているらしい。

「どちらかと言えば無理矢理押し入られたな」

「ちょ！ 裏切り者！！」

「またアンタわ！！」

そう言っていると柊姉は泉のこめかみにグリグリと拳を入れる。

「ちょ、洒落になってないって~~~~！」

そんな泉の姿が可笑しくて

オレは自分では気付かなかったけど

笑っていたんだ。



## 握られた弱みとアホ毛（後書き）

さーて次回のらき すたは？

つかさです。

だんだん倉場君とも仲良くなってきた気がするなあ。でも明日からお休みだからしばらく会えないんだよねえ。何やってるのかなあ？

次回、

「面倒なヤツら」

## 面倒なヤツら

「つゝゝゝ！　つと、朝か……」

今日は日曜で休みだな。

つゝことは、あの五月蠅い連中の相手をしなくても済むワケだ。久々のゆつくりした朝に平和を感じながら軽い朝食を用意する。あれから泉が毎朝来てゆつくりするどころではなかった）

「へえ。しばらく来ないウチにだいぶ増えたな」

久々の休日。オレは趣味の一つ、店巡りを堪能していた。

ここはゲーズ。

しばらく顔を出さないウチに随分と新刊が出ていたらしい。

……この出費は痛いな。

オレは新刊の本をいくつか取ってレジへと向かった。

「合計で　円になりまあす」

「うつす」

オレは言われた金額を財布から抜き取り、店員に渡す。本を受け取り、店を出ようとした

のだが。

「あつれゝ？　おかしいなゝ」

「どうしたネ、ひよりん？」

「いや、お金が少し足りないみたいなんスよね」

一人は眼鏡をかけた黒髪の少女。

もう一人は外国人の人だな。

会話の内容からすると眼鏡の方が金が足りないようだ。

「どうしまスカ？」

「ん〜。しょうがないツス、これは諦めるツス」  
「良かったら使え」

オレは財布から千円札を抜き取って少女に渡す。

「え？ えっと……いいんスカ？」

「あー。いいよ、気にするな」

オレはそれだけ言うたさっさとその場を離れた。

が。

「まあまあ、スコしくらいはマッってくださいナ？」

外国人さんに襟を捕まれ、逃げる事ができなくなってしまった。

余談だが『外人さん』は差別用語だからできるだけ使つなよ。お兄さんとの約束だぞ？

ソイツの買い物が終わり、オレは一つの喫茶店の前に連れてこられた。

（なんか最近ひどく流されている気が……）

なーんて思っても時既に遅し、だ。

それから数分待つと一人の少女がこちらに来た。

「おー、先輩。お待ちしてたっス」

「やー、メンゴメンゴ。やまとを引っ張ってくるのに手間取っちゃって」

その少女は肌の色が少し黒い背の高い少女だ。

もう一人はソイツより少し低いくらいのポニーテールが2つに分かれた髪型をしている。

「ちよっと、こう？ いきなりこんな所に呼び出して何のつもり？」

「いや、ひよりんがさあ。少しばっかりお願いしたいことがあるみ

たいだね？」

その後もなんかソイツ等でこそこそと話している。  
なんなんだよ一体……。

その後、なんだかんだの無理矢理な流れで誰かの家に連れてこられた。

何奴の家かは知らんが見知らぬヤツをいきなり連れてくるなんて何者だ？

すると眼鏡の少女はスケッチブックを取り出し、何やら書き始めた。ちなみに外国人の方は棚にあるマンガをいくつか取りだして読み始めている。

「お待たせ。お兄ちゃんから借りてきたよっ！」

するとさっきの背の高い少し色黒のヤツは何着かの服を持ってきた。ただ問題なのはそれらがBAS RAなりハヒなり何なりのアニメやゲーム関連のコスプレ衣装だ。

「あー。その前にちよつと聞きたいんだがお前達は何者だ……？」

「おつと申し遅れましたね。私は“八坂こう”です。どーぞよろしく」

背が高いのは八坂、ね。

「私は“田村ひより”ッス」

眼鏡が田村、と。

「ワタシは“パトリシア＝マーティン”といいマス！ よろしくネ！」

外国人さんはパトリシアか。

「……私は“永森やまと”です」

ポニーテールは永森ね。

「それで、そつちはどちら様でしょうか？」

「あー、……倉場かいとだ」

こういうのは最早抵抗するだけで無駄だ。

その辺はもうここ数日絡みっぱなしの泉で学習済みだ。

「それで？ いい加減にオレを解放してくれ」

「まあまあ、急がない急がない。こっちの指定したことをしてくれ  
たらすぐに帰してあげますから」

「分かった分かった」

「そうです！ やまとを恋人だと思って!!」

「おお！ なかなかいいツスよ！ 次のイメージがどんどん沸き上がってくるツス!!」

「かなりイイデス！ もっとエンギにシューチューしてクダサイ！

！」

オレが今、何をさせられていると思う？

絵のモデルだつてサ！（泣）

つて、いくら何でもこれはマズイだろ。

お子様にお見せできない感じになりつつあるよ。モザイクかけられるだろ。

みたいのが各衣装で行われ、オレは精神に大打撃を受けた。

「ハア……いろんな意味で疲れたな……」

「ごめんなさい……。こうが迷惑をかけて」

「いや、永森は悪くないさ……」

どっちかと言えばコイツも被害者だからな。

アイツら人に容赦なく指示出して来るもんなあ……。

何度「ちょ、おま、自重！」って叫んだか分からん。

「いやー。ありがとうございますね。おかげで次のコミケの題材が揃いそうです」

……What?

「コミケ……って、もしかして売るつもりか……?」

「ええ。倉場さんは格好イイから変えようがないッス。永森先輩もなかなかでしたよ?」

「ちょ、田村さん!? あなた一体何考えて……」

「いいじゃないデスカ。ゴウにイればゴウにシタガうモノですよ?」

「そうそう。業に入れなきゃ!」

「「字い違う!!」」

世の中にはいろんなヤツがいるモンだな……。

でも、悪い気はしなかったかもな。

## 面倒なヤツら（後書き）

さーて次回のらき すたは？

みゆきです。

倉場さんも随分とみなさんと馴染んでいらっやいますね。そういえばさっきの休み時間に保健室に向かわれておりましたが具合でも悪いのでしょうか？

次回、

「抜け出しの一時」

## 抜け出しの一時

「ちわーす」

「はい……って倉場君？　またサボリですか？」

「鬱な気分なだけです」

2時間目が終わってオレは保健室へ出向いていた。

別に特別具合が悪いワケじゃない。

先生の言うとおりサボリだ。

オレは特等席の窓際のベッドに腰掛ける。

「もう去年や一昨年と合わせてもかなりの時間来てますよ？　少しは授業に出たらどうですか？」

「必要な単位は取りますよ。あとは面倒くさいだけです」

養護教諭の“天原ふゆき”先生だ。

口ではそんなことを言っているがオレの行動をあまり咎めようとはしない。

思えばこの人が高校で初めてまともに会話した人かもしれない。

オレはゴロリとベッドに身を投げて天井を見る。

ふと保健室のドアが開き、一人の人物が入ってくる。

見た目はほとんど泉と変わらない程の身長で眼鏡をしている。

陵桜学園の生物担当の“桜庭ひかる”先生。

3年C組の担任で天原先生の幼なじみ。こんなナリでもれっきとした大人だ。

「倉場。今、とっても失礼なことを考えなかったか？」

「イエ、ナニモ」

「まあいい。ふゆき、休ませてくれ」

「アナタもですか？　倉場君はともかくひかるさんは教師なのです



から控えた方がよろしいのでは……？」

「いーだろ、別に」

そう言つて桜庭先生はさつさとベッドに居座つた。

天原先生は少し溜息をつくと再び事務の仕事に戻つた。

「そういえば先生。最近はいつも端のベッド塞がつてますけど、いつも誰かいるんですか？」

「ええ。1年生の子なのですけどね、体調を崩しがちなんですよ。へえ。3年になって2、3回来たがその時はいつも塞がつていて変だと思つたんだ。

だつてその端のところ、あんまり人気じゃないしな。

再びドアが開き、今度は一人の生徒が入ってくる。

「あの……天原先生」

「あら、岩崎さん？ 小早川さんならまだ寝ていますよ？」

「はい。少し様子を見に來ただけですから」

……小早川？

最近その名前を聞いた気がするがどこだつたかな……。

「みなみちゃん……？」

端のベッドのカーテンから一人の生徒が顔を出していた。

ソイツは高校生という年齢には釣り合わない身長の

小早川ゆたかだつた。

「あれ、倉場先輩？」

「あ、ああ。久しぶり……」

オレはぎこちなく手を振る。

そのオレの行動に桜庭先生と天原先生は随分と驚いた表情になった。

「おお。倉場が他人の名前を覚えているとはな……」

「ひかるさん……。ですが、倉場君もお友達がいたみたいでよかったですね」

「ちょ、友達ってほどじゃなくて……！」

まあ落ち着け、オレ。

ここは保健室だ。騒いでも仕方ない。

小早川はオレの方を見てはにかむように笑った。

「倉場先輩、あの時はありがとうございました」

そう言っつて小早川はペコリとお辞儀をした。

「あの、事情は分かりませんがゆたかを助けてくれてありがとうございます」

もう一人の生徒の方もオレにペコリとお辞儀する。

「紹介しますね。友達の“岩崎みなみ”ちゃんです」

「岩崎みなみです。よろしく願います。えっと……」

「……倉場かいとだ」

……そうだ。

もう泉に会ってからオレの平穏な日常は狂い始めてたんだ。

もうなるようになれ、だ。

小早川は具合が良くなったらしく岩崎と一緒に教室へ戻っていった。

「あ~~~~、くそ！」

オレは自分の中で整理のつかない気持ちを投げ出すようにベッドに倒れ込みどうしようもない歯がゆさに頭をガシガシと掻いた。

そんなオレを桜庭先生と天原先生は暖かい目で見ていた。

## 抜け出しの一時（後書き）

さーて次回のらき すたは？

ゆたかです。

倉場先輩を部室棟の前で見たんだけど一体何をしていたのかなあ。  
お姉ちゃんの話だと部活には入ってないって言うってたし……。

次回、

「ア二研へようこそ！」

ア二研へようこそ！

「こっちに来るのは久しぶりだな……」

オレが来ているのは部室棟。

文化系の部室がある所で昼休みにこんな所に来るヤツはほとんどいない。

つまり絶好の昼寝場所と言いうことだ。

こういう天気の良い日は屋上で寝るに限るな。

なんてことを思いながら歩いているとオレの肩にポン、と手が置かれた。

「あつれ？ 倉場さんじゃないすか？」

「……八坂」

なんてこった。

まさかコイツが陵桜の生徒だったのか。

「いや」。先輩だったんですねえ、意外や意外ですよ」

「オレもだよ……」

前回の経験からコイツに関わるとロクな事がないのくらいは分かる。

なんでこいつの名前を覚えてるかって？

忘れられるわけねえだろーが！！

「それはそうとお前はなんでここにいるんだ？」

「ん？ それは私がア二研の部長だからですよ」

答えになつてねえよ。

部長つてだけでここに来る理由にはなっていない。

「あとは暇つぶしです」

「そうか。じゃ、オレは屋上行くから」

オレはさっさとその場を離れ

「そうだ！先輩、どうせですからお茶でも如何ですか？」  
「られませんでした。」

ちよ、八坂。腕握るな握力強すぎイタイイタイイタイって！

## 場所移動描写

八坂に連れてこられた部屋。

ドアにはでかかと『アニメ研究会』と書かれている。

「やつほー、来たよー！」

乱暴にドアを開けて八坂は叫ぶ。

って、叫ぶって事は何人かいるってことだよな。

「あれ？倉場さんじゃないスか」

「田村か……」

例の事件の犯人その2、田村だ。

やはりというか何というか陵桜ココの生徒だったんだな。

「一応聞いておくがやつぱりパトリシアも永森もココにいるんだな？」

「あー、いや。やまとは陵桜じゃなくてフィオリナの方にいるんです」

フィオリナってのは聖フィオリナ女学院のことだ。

かなりのお嬢様学校で学力もそれなりのレベルらしい。

「あれ？ 知らない人がいる」  
「そういう時はまず挨拶でしょ……」

ん？ 初めて見るヤツだな。

一人は髪を四つに束ねているヤツ。

もう一人は癖毛の髪で眼鏡をかけている。

「お、二人とも。紹介しとくね。先輩の倉場かいとさんだよ」  
なんか勝手に紹介されてるな。

「先輩、部員の“山辺たまき”と“毒島みく”です」

「ど〜も〜。2年の山辺で〜す」

「同じく毒島です。よろしく」

「……ああ……」

どうして世の中はこうも上手くいかないんだろうな。  
オレは静かに人生を過ごしたいだけなのに……。  
神ってるのはどうもオレの意識に反した出来事を起こすらしい。

『あの時』だつて。

「先輩？」

「んあ？」

「お茶、どーぞ」

「あ、ああ。いただきます」

オレは八坂が淹れてくれた緑茶を啜る。」

「それはそうと、先輩はアニメとか興味あるんですか？」

「え？」

山辺がいきなりそんなことを聞いてきた。

「まあ、少しは」

「何に興味が？」

毒島も少し興味が出たらしく、オレに聞いてきた。

結局、オレは昼休みが終わるまでそいつ等と話をすることになった。  
何とも言えない感情を抱えたまま……

ア二研へようこそ！（後書き）

さーて、次回のらき すたは？

みなみです。

偶然3年生の教室の前を通ったら倉場先輩が昼食をとっていました。  
随分と大所帯でしたね……。

次回、

「元気娘や聖人2号も先生も」



## 元氣娘や聖人2号も先生も

「倉場くーん、ご飯食べよう？」

「……」

無視だ。

このテのヤツらは反応すればそこから流されるに決まっている。だったら無視すればいい話だ。

「ねえ、無視？」

「……」

「聞いてる？」

「……」

「……エロガツパ」

「誰がエロガツパだ！！」

しまった。

もう乗せられた。

「と、いうわけでご飯食べよう」

「はあ……。もう好きにしてくれ……」

「やった〜！つかさ〜、みゆきさ〜ん、許可取れたよ〜」

そう言つて泉は柊妹と高良をこっちに呼んだ。

2人は近くの席から椅子を借りてオレの席に近づける。

「おす」

「お、かがみん」

「かがみん言うな」

しばらくすると柊姉も来た。

ああ、もう！　なんでこう次から次へと！

「なあなあ、柊。この男誰だ？」

「初めて見る子ね？　新しいお友達？」

また増えた……。

ショートカットのヤツとロングでカチューシャで前髪を上げてるヤツだ。

コイツらも遠慮無く誰彼構わず連れて来やがって……。

一度くらい強く言った方がいいのだろうか？

……いや、コイツらはいくら強く言っても聞かないだろうな。

特に泉はこの性格だからな。

「倉場君。こっちの馬鹿っぱいのが日下部。こっちが峰岸よ。2人とも、この人は倉場かいと君」

「馬鹿っぱいはねえだろ」。私は「日下部みさお」だぜ、よろしくな」

「柊ちゃんの友達の“峰岸あやの”です。よろしくね、倉場君？」

「……倉場だ。……よろしく……」

別によろしくするまで仲良くするワケじゃないんだが。いわゆる社交辞令だな。

軽い自己紹介が終わり、3人も席に着く。

各々弁当を広げ、箸を進める。

「なあなあ、倉場はちよつと前までいなかったけど何で仲良くなったん？」

「仲良くしているつもりはないが」

「ああん、そんな連れないこと言わないでよ」

「だあ！ 離れる！」

この2人は同時に相手すると面倒だな。

泉1人でも大変だからな。類は友を呼ぶってな。

「くすくす。倉場君って面白いね」

「おい、峰岸だっけか？ この……日下部？ を相手してくれ。オ

レ一人じゃ対処できん」

「みさちゃん、倉場君のこと気に入ったみたい」

「な、あやの。コイツすげえ面白いぜ？」

なんてことをオレをいじりながら言っている。

なんかこの2人も見てるとホントの姉妹みたいだな。

「お、なんや随分賑やかやな？」

「お、黒井先生」

この関西弁は確か担任の“黒井ななこ”先生だったか？

先生はオレ等を何度も見ながらにやにやと笑う。

「にしても、倉場は早速ハーレムを築いたんやなあ。このクラスに限らずお隣のクラスまでもか」

「違いますよ……」

「でも、倉場君。初めは嫌がってたけど最近是一緒にお昼食べても何も言わなくなったね」

「ええ。段々とこのクラスに馴染んでいって貰えているようで何よりです」

違うんだ……。

オレは馴染んだんじゃない。

あんた等には何か悪い気がして言えないだけなんだあ！！  
泉とか柊姉には思っていることを言えるんだがな……。

何とも言えない歯がゆさにオレは思わず頭を掻きむしった。

「倉場君？ あんまりそんなことすると禿げちゃうよ？」

「そうさせてるのはどこの何奴だよ……！」

まあ、そんな感じで話しているせいで昼休み終了直前に弁当をかき込むハメになった。

たった数日で随分と色々なヤツを見てきたわけだ。

なんだろうな。  
この気持ちは……。

元氣娘や聖人2号も先生も（後書き）

さーて次回のらき すたは？

ひよりです。

4月もあつという間に半分過ぎちゃったツスね。そういえば倉場先輩も最近私達に何も言わなくなってきたような……？

次回、

「諦めた感情」

## 諦めた感情

新しい学年になって半月が過ぎた。

今回はあまりに短時間にインパクトのある事件が多すぎたな……。なんてことを思っても後悔先に立たずだ。

そもそも泉達があんなになってるのもオレが悪いんだ。

新学期が始まったあの日、気まぐれでカードを拾ってしまったオレが。

あの時、気まぐれを起こさなかったらオレは今でも一人でいただろうか？

「はあ……」

何でオレが……

「アイツらの分まで弁当なんて作って行かなきゃならないんだあ

……」

まあ、何でオレがアイツらを含め5人分の弁当を作っているかというのは今日の昼まで遡る。

つーわけで回想シーン。

最早定着しつつある五人での昼食。

まず泉が一番に来てその後に柊妹、高良そして最後に柊姉と言った感じだ。

いつもどおりに適当な話をしつつ、箸を進める。

「でさあ、今日はアイテムドロップがウハウハでさ」

「はいはい」

オレは泉の話に適当に相づちを打ち、ハンバーグを囓る。

「そういえば、つくづく思ったけど倉場君で料理上手いのね。一人暮らしなんですよ？」

「まーな」

「スゴイねえ。私一人じゃきつとできないよ」

「まあ、何とかなってるけどな」

「ですが既に自立した生活ができているというのは素晴らしいことです」

「別にそんなんじゃないよ」

これらもほとんど適当に答えているだけだ。

いちいち話題を上げるのも面倒だからな。

「じゃあさ、倉場君。私達にお弁当作ってみてよ。倉場君の実力、気になるしね」

「はいはい」

てな具合だ。

その後は色々と口車に乗せられて現在に至る。

まあ、普通ならシカトするんだがな。

思った通りというか、何というか、やはり祖母の教えが生き、5人分用意しているわけだ。

平穏な日常なんて来そうにないな……。

そんなことを思いつつ、残りの準備を済ませてオレは早々に床につ

いた。

翌日。

「おお。倉場君、おはよう」

「倉場君、おはよう」

「おはようございます。倉場さん」

「ああ、おはよう」

オレは3人に挨拶を返し、席に座る。

ちなみに最近席替えをしたのでオレの周り

一オレ 泉

一柊妹 高良

という感じに授業中もゆっくりできない状況に陥っている。

「そういえばさ、倉場君。お弁当作ってきた？」

「お前が作れって言ったんだろ？ 一応作ってきたよ」

オレは鞆の中から弁当箱を取りだし、各々に渡す。

泉は受け取った弁当を早速開いている。

「おお！ 何かスゴイ家庭的なお弁当だね！」

泉は感嘆の声を上げる。

柊妹と高良も弁当を見て「おお……」と驚いている。  
ま、いつもよりは少し豪華だからな。

オレはコイツらに食わせるために豪華にしたのか？  
いや、気まぐれだと 思いたい。



「そーいえばさあ」

「ん？ なんだ？」

泉は急に何かを思い出したように口を開いた。

「流石に2週間近く一緒にいるわけだし、名字呼びってのもおかしくない？」

「……おかしくないな」

「えー？ おかしいよ」

何を言い出すかと思えば……。

オレはこのままでいいけどな。

「ねえ、つかさもそう思うよね？」

「えー、あー、うん。そうだね！」

お前もか。

「みゆきさんはどう？」

「私も、できればその方がよいと思いますね」  
マジでか。

「というわけで、3対1だよ？ どうする？」

「どうもしねえよ」

……なんで一同しゅんとなるんだ。

「おゝす、みんなどうしたの？」

柊姉が来た。

状況説明中

「なるほど。じゃあ私はこなた達に一票」

「んなつー！」

「だっていつまでも姉とか妹とかで呼ばれても不便だしね」  
そういう理由か！

でもまあ、泉達はともかく柊姉妹はそうだな……。

「というわけで！ 名前呼び頑張っ  
てね！ かいと君！！」

……はあ。

仕方ないな……。

「分かったよ……。こなた、かがみ、つかさ、みゆき」

オレはもう一人でいることを諦めたんだ。

自分の罪の意識を段々と忘れて……

## 諦めた感情（後書き）

さーて次回のらき すたは？

パティでス！

カイトはどうミてもギャルゲのシュジンコウですヨ！ ヨコクはジヤンケンでシめるモノデス。ジャンケンポン！ ウフフフフ

次回、

「実力をこの目に」

## 実力をこの目に

4月も後半に差し掛かった。

この時期、3年は実力テストというモノがある。

そしてテスト期間なるものが存在し、3年は早い時間の帰宅ができるのだ。

つーわけで早めの授業が終わり、下校時間となる。

「っっっ！　いくら時間が短いつて言ってもやっぱり授業は面倒だよなあ……」

「あゝ！　その気持ちはよく分かる！」

そう言つてこなたとがっしりと手を結ぶ。なんだこのノリは。

「うううう。私は全然勉強できてないよぉ」

つかさはそんなことを言つて泣いている。

「みゆきはどうかだ？」

「私は少し復習できてないところがありますね」  
なるほど。

「かがみは？」

「私はまあまあよ。あと何回か通ればできるわね」

「お前らはいいいなあ。オレなんか全然できてないぜ」  
なんとか勉強しようとは思うんだけどな。

なぜかいつも集中が乱れてしまう……。

「やっぱりPCつけたまま勉強するのはダメだな……」

「そんなことしてるのか、アンタわっ！」  
やっぱりか……。

今日辺りからPCは封印だな。

「ねえねえ、みんな今日これからヒマ？」

こなたは唐突にそんなことを聞いてきた。

「オレは特に何も無いな」

「同じく」

「私もないよ？」

「はい。私もこれといった予定はないです」

「じゃあさ、これからみんなで勉強会をしよう！..」

「　　つと、こんな感じが」

現在オレは家を掃除している。

色々と考慮した結果、勉強会はウチで開催することになった。

そんなわけではばらくしていなかった掃除を急いでしているワケだ。

こなた達は一度、家にもどって準備をしてから来るらしい。

「お茶の買い置きは大丈夫だな。あとは待つだけか……」

ピンポーン

インターホンが鳴った。

「つと、来たか」

オレは急いで玄関へ向かう。

「やほ」

「来たわよ」

「こんにちは」

「おう、いらつしゃい」

こなたにかがみにつかさか。

みゆきはいないみたいだな？

「あゝ、みゆきさんは遠いからね。少し遅れるよ」

「そうか。じゃあ、先に始めとくか」

しばらく勉強しているとまたインターホンが鳴る。

「こんにちは、かいとさん」

「みゆきか。これで全員だな」

全員集まり、本格的に勉強会を始める。

「えーっと、ここはどうすればいいんだ？」

「あ、そこは結構難しいところですね」

「ああ、もう！ 何で数学なんてあるんだー！！」

「あら、かいと君って数学苦手なのね」

「まあな。おかげで毎年夏休みには補修だよ」

「ううー。私も数学苦手だよお」

「まあまあ、つかさ。いざとなったら一夜漬けで乗り切ろうよ」

「それも無理……」

「あんた達も少しはまともに勉強しなさいよ……」

なんて他愛もない話をしながらテスト勉強をする。

一見、何もできてないように感じたけど意外と身に付いたもんだ。

来たる実力テストの日！

は、すっ飛ばして。

本日は実力テストの結果が出る日だ。

ココ陵桜学園は一学年10クラス以上もあるマンモス校のため、張り出される順位表は何mもある。

そしてその前にはこれまたずつつつつら  
と生徒達の壁が  
展開されている。

そんなわけで自分の名前を捜すのも一苦労なわけだ。

「お、みゆき。3番じゃないか」

チラリと見えた名前にオレは驚きの声を上げる。

「スゴイじゃないか！」

「いえ。そんなことは……」

「みゆきはいつも上位だから捜すの簡単なのよねー」

「でも、つかさは後ろから捜すとすぐ見つかるんだよねー」

「こなちゃん。ホントかもしれないけどあんまり言わないでえ……」

……

そんなつかさを同情しつつ、他の名前も捜す。

「かがみは……59位か。なかなかだな！」

「あはは……。そんなことないわよ」

「照れるかがみん萌えー」

「萌え言うな！」

先に次を見ていたつかさは「あ」と声を上げる。

「かいと君は82位だよー」

「どれどれ……ホントだな」

82位か。まあまあだな。

いつもならもつと後の順位なんだけだな。

やっぱりコイツらと一緒に勉強したのが良かったのか……？

そんなことを思いつつ、残り2人の名前も捜す。

「300位を過ぎたな……」

「そうね……」

流石にここから後ろはヤバイ。

ちなみに300後半あたりは確実に補修組だ。  
なんとしてもそれは避けてほしいな。

という思いも虚しく……。

「こなた……391位……。つかさ……406位……」  
まあ、何というか……。

こなたとつかさの周りにはず〜ん……と黒いオーラが浮いている。  
流石にこれはかける言葉が見あたらない。

「うう……。また補修だよぉ……」

「面倒臭い……」

「げ、元気出してよ2人とも！」

「そ、そうですよ。気を確かに……」

「そうだぞ！ 次頑張ればいい！」

実力ってのはこうも目に見える形にされると凹むモンだな……。



## 実力をこの目に（後書き）

さーで、次回のらき すたは？

こうです。

いやー、倉場先輩も変わりましたねえ。反応が以前とは別人ですよ。また、やまとと一緒に会いに行こうかなー。

次回、

「お宅訪問・泉家 その1」

## お宅訪問・泉家

「こなた、今日ヒマか？」

昼飯中にオレはそんなことを聞いていた。

「んゝ、まあヒマかなゝ」

「じゃあ、今日遊びに行つていいか？」

.....

アレ？ 何で沈黙？

「いやー、かいと君てばあ。おとーさんに挨拶は早いでしょー？」

「なっ！？」

「は！？ 何！？ あんた達、付き合つてたワケ！？」

「え！？ そうなの？」

「びつくりですゝ」

何かあらぬ誤解を生んでいる！

「ち、違つ！ そういう意味じゃない！」

「じゃあ、どういう意味？」

かがみは身を乗りだしてオレを睨んでいる。

かがみ様、目が怖いデスヨ……？

「まあ、その……アレだ。お前達ともまあまあ仲良くなつたし？

家の場所くらい把握しとこうかな？ とか思つたり思わなかつたり

……？」

何故に所々疑問系？

しかしかがみはそれで納得してくれたようでスツと身を引く。

「ま、まあお前達の家も訪問させて貰うと思うからさ。今回はこなたの家が近いからたまたまだよ」

「なーんだ、そういうことかあゝ」

「うふふ。そういうことならいつでも歓迎いたしますよ？」

よかった……。

なんとか誤解は解けたな……。

「ん、まあ来てもいいけどあんまり身の安全は保証できないな」  
こなたは一瞬よからぬことを言った気がするがよく分からなかった。

泉家

「結構大きな家だな……」

以前、小早川を送りとどけた際に見てはいたがこうしてまじまじと見るとやはりでかい。

アイツがあんなにもオタグッズを沢山購入しているわけだ。

そんなことを思いながらチャイムを鳴らす。

『ほ、い、どちら様？』

「こなた、オレだ」

『はいは、い、今行くよ』

するとすぐにドアが開いた。

「いらっしや、い」

「おう、お邪魔します」

出てきたのはいつも見慣れているこなたの顔だ。  
その隣には

「ああ、小早川もコイツの家に行ったか」

「先輩、こんにちは」

実家が陵桜から遠いため、親戚であるこなたの家にいるらしい小早川もオレを出迎えてくれた。

「よう。元気そうじゃないか」

「はい。最近は大分調子も良くて……」

「お茶持ってきたよ」

とりあえずこなたの持ってきたお茶を一啜り。

「なあ、こなた」

「ん、どしたの？」

「オレまだお前の父さんと母さんに会ったこと無いんだが」

「あー、うん……おかーさんはもういないよ？」

「え？」

「私が小さい頃に死んじゃったんだって」

「あ、そう……なのか」

こなたの気持ちは痛いほど分かる。

オレだって、あるのは幼い日の思い出だけ。

父さんと母さんが、死んだ『あの日』。

「おとーさんは基本的に引き籠もりだからあんまり見ないかなー」

「えー！？ 引き籠もりなの！？」

「えつとですね、おじさんは小説家なんですよ」

「へえ……小説！？」

小説家つてのは成功する人は成功すると聞いたことはあるがまさかここまでとはな……。

さぞかし立派な人なんだろう。

なんてことを思っていると奥から作務衣を着たオッサンが出てきた。

「つゝゝ！ こなた、お茶淹れてくれないか？」

「ん？ おとーさん今日締め切りじゃなかったの？」

「そうだなー。夕方には出しに行かなきゃな、ってその子は？」

オッサン……。

こなたは『おとーさん』と呼んでいるあたりからこの人はこなたの父親なんだろうな……。

まあ、似てる。瓜二つと言ってもいいぐらいだ。

こなたのオッサンヴァージョンという感じ。

「なんか、失礼なこと考えてない？」

「イエ、ナニモ？」

こなたはオレをじと目で睨んでくる。

どーでもいいけどおじさん無視してやるなよ。

「紹介するね、ウチのおとーさん。おとーさん、友達の倉場君だよ」

「ども、倉場です」

「そ、そうか……。あくまで聞いておくが、うちの娘とはどういった関係で……？」

？ 一体何を聞いてくるかと思えば。

「まあ、友達ですけど……？」

「ほーう……。本当か……？」

何故にそんな疑ってくるんだ？

オレ、何かしたかなあ。

「ほら、おとーさんは締め切り近いんだから早く汁！」

こなたはおじさんを奥へと押しやる。

ヒデエ。

ふう、と一息つきまた椅子に座るこなた。

「おとーさん、前に私に男友達ができたら抹殺する、とか言ってたな」

「先に言えよ！！」

オレの生命に危険が及ぶところだっただろ！

……まあ、大事にされてるって事で、いいんだよね？

「こなた、親父さんのこと大事にしるよ？」

「でもあんまり優しくしても調子に乗るからね」

「ほどほどにな」

やっぱりオッサンはほどほどに優しくすべきだな。  
つけ上がるし。

うちの親父もそうだった……。

「っ！」

「？ かいと君？」

「先輩？」

「……いや、ただの目眩だ」

血にまみれるオレの手。

そこに横たわっているのは……？

お宅訪問・泉家（後書き）

さーて、次回のらき すたは？

やまとです。

先日、ふと気にかかって鷺宮神社へお参りに行っ たんです。季節は  
ずれてきたからあまり人はいなかった んですけど……。

次回、

「お宅訪問・柊家」

お宅訪問・柊家 前編（前書き）

今回は2部構成にしたいと思っています。



## お宅訪問・柊家 前編

恒例の友人達のお宅訪問だ。

まあ2回目だし何が恒例なのかは分からんがとにかく今日はかがみとつかさの家だ。

こなたの家からもあまり遠くなく電車でほんの少しだ。  
オレなら自転車で行けるかもしれない。

そんなことを思いながらインターホンを鳴らす。

バタバタと荒い足音がしてドアが開いた。

「はいはい？ どちら様？」

見た感じはかがみやつかさより少し年上っぽい人だ。  
顔の感じからしてかがみに似ているが。

「えっと…… かがみさんとつかささんの友達の倉場です」

「ほう、私は柊まつり。かがみとつかさの姉だよ」

「よろしく願います」

「ま、上がりなよ」

「お邪魔します」

かがみとつかさの部屋は2階にあると聞き、階段へ向かう。  
途中に居間があってそこで一人の女性がテレビを見ていた。

「お邪魔してます」

「あら、いらつしゃい」

「かがみさんとつかささんの友達の倉場です。よろしく願います」

「私は柊みき。かがみ達のお母さんです」

「……………」

「どうかした？」

「お母さん……ですか？」

「ええ」

「お母さん……ですか。失礼しました」

お母さん……。

今時の母親はあんなにも若いのか？

いや……でもかがみの家は4姉妹って聞いたぞ……。

てことは少なくともXX歳はいつてるよな……。

なんてことを悶々と考えながら階段を上る。

KAGAMIと書いてあるプレートの掛かった部屋のドアをノックする。

「かがみー、来たぞ？」

「えっ！？ あ、いらっしやい！」

「おう」

とりあえず促されて部屋へと入る。

「ちよつとつかさも呼んでくるわね」

「分かった」

「言っておくけどくれぐれも くれぐれも 部屋漁ったりしないで  
よね」

（2回言った……）

この時かいとは「何で2回言うのカナ？ 何で2回言うのカナ？」  
と思ったという。

まあ部屋なんか漁るヒマもなくつかさが入室してきたわけだが。

「かいと君、いらっしやい」

「よつす。お邪魔してるぞ」

「ん？　つかさ、髪乱れたまんまだぞ？」

「ふえ！？」

「まったく、昨日夜更かしするからよ」

「だって」

えへへ、と笑って頬を掻く仕草をするつかさ。

一体何をしていたんだろうな。

「この子ったら夜中までずっとクッキー作ってたのよね」

「だってかいと君が来るっていうから食べて貰おうかなって……」

「へえ、ソイツは嬉しいじゃないか」

よく誤解されがちだがオレは結構甘い物は好きだ。

嫌いなモノっていったら人参だな。

アレは食えん。食べ物じゃない。

「そういうことだから後で食べてあげてよ」

「言われなくても御馳走して貰うつもりだ」

「アンタ結構図々しいわね……」

そう言ってアハハ……と談笑する。

やっぱりつかさの作った物は美味しいな。

そんなことを思いつつ、また一つクッキーをほおばる。

「ところでさ、お前達の母親って歳いくつだ？」

「……」

「……」

2人は顔を見合わせる。

「それがさあ、私達がいくら聞いても教えてくれないの」

「うんうん、いつもはぐらかされちゃうんだよねえ」

「ふうん……」

やっぱりオレには母親がいないからそういうのはよく分からんな……

…。

「ねえねえ、かいと君」

「ん？」

つかさは唐突にオレに声をかけた。

「今日の夜はヒマかなあ？」

「まあ、夕飯の準備くらいだが」

「だったら今日ウチで食べていけない？」

「どうしたのよ、いきなり」

「あ、いや、かいと君一人暮らしたから大変だし寂しいかな〜って  
思って……」

……そうか。

つかさもつかさなりにオレのことを心配してくれてるのか。

「ああ、御馳走になるよ。でもいいのか？」

「大丈夫よ。元々大家族なもの、一人増えたぐらいで何も言いやしないわよ」

「じゃあ私、ちょっとお母さんに言ってくるね」

つかさは立ち上がり、部屋を出て行く。

「ホント、悪いな」

「いいのよ、困ったときはお互い様」

「……そうだな」

オレは久しぶりの大人数の夕食に僅かながら胸を躍らせていた。

お宅訪問・柊家 前編（後書き）

さーて、次回のらき すたは？

みさおです。

あんだけ言っただに柊はまたチビツ子の方に行っちゃまうんだよなー。  
この間も「善処する」って言って流しまくってたし。

次回、

「お宅訪問・柊家 後編」

## お宅訪問・柊家 後編

柊家で夕食を御馳走してくれるお礼に夕食の準備を手伝うことにした。

「倉場君、悪いんだけどこっちのお野菜切って貰えるかしら？」

「はい、お安いご用ですよ」

包丁を拝借して一口サイズに切っていく。

このメニューだとこれは野菜サラダかな？

「倉場君はお料理上手いのねえ」

「ええ。オレ一人暮らしなんで弁当とかは自分で作ってます」

「そうなの……。寂しくない？」

「慣れてますから」

切り終わった野菜を器に移し、ハンバーグを火にかける。

「ふう……。あとは焼けるのを待つて……」

「倉場君、もう休んでいいわよ？」

「え、でも……」

「お客様に働かせるなんて悪いわ」

「……じゃあ、お言葉に甘えて。なんなら掃除か何かしましょうか？」

「くす。いいわよ、ゆっくりしていて？」

「はい」

する事もないのでとりあえず居間に行く。

ちなみにかがみとつかさは近くのコンビニに行っている。

『ただいまー』

『ただいま』

?

男性と女性の声。

多分父親ともう一人の姉さんだろうな。

玄関の方から中年くらいのおじさんとまだ若い女性が来た。

「おや、来客か？」

「はじめまして、かがみさんとつかささんの友達の倉場かいとです」

「はじめまして。父のただおです」

「私は長女のいのり。よろしくねー」

「はい、今日は夕食を御馳走になることになっています。ご迷惑かもしれませんがよろしくお願いします」

「そうか、こちらこそよろしく」

ただおさんは微笑でお辞儀をした。

オレもすぐにお辞儀で返す。

優しそうな親父さんだったな。

数分後、かがみとつかさも帰ってきたので夕食タイムが始まる。

「いただきます」

うん、超多重音声。

まあそんなことは気にせず夕食は始まった。

おばさんの料理はなかなか上手くて箸がよく進む。

「倉場君、お味はどう？」

「すごく美味しいです。やっぱり自分で作るのとは違いますね」

「もうお世辞ばかり」

しかしおさんの料理はそこのレストランで出てくる料理よりも

上手いかもしれないな。

かがみ達もこんな料理が毎日食えるなんて幸せ者じゃないか。

それにしても柊一家は仲がいいな。

聞けば長女のいのりさんは既に働いていると言っし。

家族で一緒にいるのはいいことだよな。

オレには、できなかったことだから……。

「っ！」

「？ かいと君、どうしたの？」

「……いや、少し気分が悪いだけだと思うんだけど」

「そうね、顔色悪いわよ」

「……。すいません、お茶貰えますか？」

「ちよつと待ってね、はいよ」

「どうも」

オレは鞆から錠剤を一つ取り出し、口に放りお茶で流し込む。

「今の何？」

「……ただの風邪薬だよ」

その後も楽しい夕食が続いたのだった。

「いやー、今日は世話になったな」



「いいのよ、また来てね」

「うん、いつでも来ていいよ」

「おう、その時は今日の礼も兼ねてな。じゃな」

「バイバイ」

手を振るかがみ達にオレも手を振り返し、自転車を走らせる。

大人数の食事、いいもんだな。

お宅訪問・柊家 後編（後書き）

さーて、次回のらき すたは？

あやのです。

この前、高良ちゃんが一人だけ都内で暮らしてるのが寂しいって言うたの。住む場所なんて関係ないのにね。

次回、

「お宅訪問・高良家」

お宅訪問・高良家（前書き）

なんかこの回は割とわけ分かんないです

## お宅訪問・高良家

「これはまたスゴイ家だな……」

今日はみゆきの家を訪問することになっていた。

のだが、オレは呆氣にとられたままインターホンを押すこともままならない。

圧巻も圧巻。

豪邸と呼んでいいんじゃないかというほどの家。

庭は広いし、家自体もでかい。

ウチのアパートとは大違いだな……。

とはいえ、家の前でうろろしているのは変質者と間違われる可能性大なので意を決してインターホンに手を伸ばす。

「先輩……？」

「？ その声は、岩崎か」

「はい……」

岩崎は向かいの家の門から顔をのぞせていた。

「みゆきさんの家に何か？」

「んー、なんだろ。家庭訪問的な？」

「はあ……？」

ま、普通は意味分かんないよなー。

「それで、岩崎はみゆきの家に何か用か？」

「はい。分からないところを聞こうと思って……」

「なるほど。じゃあ、一緒にはいるか」

「はい……」

岩崎がいることで大分気も楽になった。

チャームが鳴ると、少しして玄関が開いた。

「かいとさんもみなみもいらっしやい」

……！！

みゆきが他人を呼びすてにするだとお！？

「どうかされました？」

「あ、いや、その、名前……！」

「「？」」

「こほん、あー、そのみゆきが岩崎を呼びすてにしてた件で驚いただけだ」

「ああ。この子とはもう小さい頃からの付き合いですから」

「はい……」

「そ、そうなのか」

まあ、確かに。

みゆきから言わせてみたら岩崎は妹みたいなモノなんだろうな。  
岩崎にしてもみゆきは姉さんみたいなモノなんだろう。

妹か……。

ドクッ

「はっ……！！」

「？　どうかされましたか？」

「……いや、なんでもない」

少し衝撃の走る頭を押さえながら近くの壁を支えに起きあがる。

「ふらふらですよ？　本当に大丈夫ですか……？」

「たまに、こうして体調が崩れることがあるんだ。気にするな」

みゆきもみなみも少し心配そうな顔をしていたがオレが念押しに「大丈夫」と言って安心したらしい。

みゆきはオレたちを自分の部屋に通した。

「お茶を淹れてきますので少し待っていてください」

「おう」

「ありがとうございます」

みゆきは部屋から出て行き、みなみはテキストを開き、勉強を始める。

「あの、先輩？」

「ん、どうした？」

「少し、分からないところがあつて」

「ん？ どれだ」

「コレ、です」

みなみはテキストをずらし、オレに見やすいようにオレの正面に置いた。

さて、

S U G A K U

SUZAKUだと白い死神のパイロットになつてしまつ。  
なんて少し前のネタは置いておいてだ。

このオレ、倉場かいとは数学が壊滅的にダメなのだ。  
毎回、赤点か赤点すれすれの点数を取り、補修の常連。

まあ、この間の実力テストで補修を受けなかったのはヤマが当たったのと勉強会をしたからだ。

「……すまん。オレは力になれそうにない」  
「？」

「分からないことがみゆきに聞いてくれ」  
「はあ……？」

岩崎は訳が分からない、というような顔をしたがどうやらオレは力になれないようだ。

「お茶をお持ちしました」

数分後、みゆきは紅茶を持って戻ってきた。

「みゆきさん、ここが分からなくて……」

「えっと、そこはですね……」

岩崎はみゆきに早速分からないところを質問し始めた。

本当に姉妹みたいだな……。

姉妹、

妹

「がつ！」

「「！？」」

「ぐう……うつ……」

「！？ かいとさん！？」

「！ 私、救急車呼んできます！」

「ぐつ！ー！ー い、いい！ 呼ぶ、なっ！ー！」

「え？」

「でも……」

「いいからっ！」

オレは肩で息をしながら近くにあった椅子に腰掛ける。

「すまん、みゆき……。冷水、持ってきてくれ……」

「あ、はい！」

みゆきは大急ぎで部屋を出て行く。

「岩崎……。鞆から、タオルと錠剤……取ってくれ」

「はい……！」

岩崎はオレの鞆からタオルと錠剤を取るとオレに渡した。

オレは冷水で薬を流し込み、異常なほどに吹き出た汗をタオルで拭き取った。

「はあ……」

「大丈夫、ですか？」

「ああ……だいぶ落ち着いたよ」

「無理、してませんよね……？」

「ただの、風邪だ……岩崎」

みゆきはオレの顔を心配そうに見つめていた。

「また体調が悪くなるようでしたら何か言ってくださいね？」

「ああ……スマン……」



オレは、時が来たらこの事を話さねばならないのだろうか……。  
『あの事件』を……。

「あら、どうしたの？」

「あ、お母さん」

ふと扉の方を見ると一人の女性が立っていた。

「私のお母さんです。お母さん、お友達の倉場かいとさんです」

「……どうも」

「うふふ。私は高良ゆかりです。よろしくね」

「よろしく願います」

ゆかりさんは軽く挨拶すると1階に戻っていった。

大分落ち着いてきたオレはゆっくりと立ち上がった。

「悪いな、みゆき。今日は帰らせて貰うよ。また機会があれば来るよ」

「はい、お待ちしております」

「岩崎も、またな」

「……はい、また」

オレは……いつまでオレのままでいられるだろうか……。

そして、また時は流れ始めるのだ……。

お宅訪問・高良家（後書き）

オレの脳裏に流れる映像。

忘れたい過去。

捨てられない過去。

でも、今は話す気にならない……。

次回、

「桜が散り始めて」

## 桜が散り始めて

こなた side

4月も終わりに近づいて変わったことが一つ。

「かがみくん、どうだった？」

「ダメ。また誘えなかった」

「そっか……」

かいと君の態度がおかしいこと。

当初の頃のような冷たさはないが何かにつけて私達を避けるのだ。

「どうしたんだろね……」

「何が原因かしら……？」

私が考える限りでは心当たりはない。

「それにしても、かいと君が一人いないだけでだいぶ違うね……」

「そうだねえ」

まったくもってつかさの言うとおりだ。

彼といたのは一月もなかったのに。

「何か、あったのでしょうか？」

「ん、いつも通りだったと思うんだけどなあ」

私は机に突っ伏して頭を押さえる。

私の記憶ではかいと君が避け始めた二日前まではいつも通りの日常を送っていたはず。

私はそんなことを考えながらコロツケを嚙った。

かいとside

こなた達を避け始めて三日が経った。

自分でも感じが悪いと思う。

でも、仕方のないことなんだ。

そうしないと、いつか辛くなる。

アイツ等にも重荷を背負わせることになってしまっから。

だから、このままがいい。

諦めきれない気持ちを抱いたまま、今日の授業は終わろうとしていた。

のだが。

「私から逃げられると思うてか!!」

「!？」

オレの前に立ちふさがるこなた、つかさ、みゆきの3人。

「ふっふっふ。いつも最後の授業はさぼってたけど今日に限って出席したのは間違いだったね」

しまった！

ていうか、流石に見かねた天原先生に授業に出ろって言われたただけだ！

「ねえ、かいと君。何で私達のことを避けてるの？」

つかさは心配そうにオレの顔をのぞき込んでくる

「な、何でもない……」

「かいとさん。何かあるんじゃないですか？ 先日のもそうすみゆきはまっすぐにオレを見ている。」

「……わかった。そこまで言うなら、納得のいくまで話をしてやる」

オレたちは隣のクラスであるかがみを待ち、5人で屋上へ向かった。

放課後の屋上は流石に人気はなく、オレ達5人しかない。

時折吹く風は制服を揺らし、ちょっとした肌寒ささえ感じさせる。

そんな中、向かい合うオレとこなた、かがみ、つかさ、みゆき。

ほんの少しの静寂の中、オレは唐突に口を開いた。

「まず、最初に言うておく。オレにはもう関わらないでくれ」

これだけで言うてくれているような聞き分けの言いやつ等じゃないことは十分理解している。

「分かっているとは思うけど、それだけじゃ私達は納得しないよ？」

「……だろうな」

そう言うてオレは肩をすくめる。

「かいと君。教えてほしいの、そこまでして私達を避ける理由が」  
かがみは真剣な顔でオレを見ていた。

つくづく、自分の性格を呪うよ。

コイツらの頼みを断ることができないなんてね。

「怖いんだ……」

かがみ side

怖い？

「何が、怖いのか？」

つかさはおそろおそろかいと君に聞いていた。

「失うのが怖いんだ。大切な人を失うのが……」

「大切な……人……」

かいと君は私達のことをそんなにも、大事にしてくれていたんだ……。

私は胸が熱くなるのを感じながらまた言葉を連ねる。

「でも、どうして？」

「それだけでは、とても避ける理由には行き届いていませんが……」  
みゆきも何時になく納得のいかない、という表情をしていた。

かいと君は苦い表情を浮かべると少し俯いた。

「それは……。オレの過去から話さなきゃいけない……」

「過去……？」

「どんなことがあったのか……？」

こなたは不安そうな顔でかいと君を見ていた。

「知られたく……。ない。オレの過去を知ってしまったら、きっとみんなはオレのことを軽蔑するから……」

「……。なんで？」

「……」

そこまでして知られたくないかいと君の過去って、何？

「私は聞かない。かいと君が話したいと思うまで聞かないよ?」

こなたはそんなことを言っていた。

「誰にだって知られたくないことの一つや二つあるでしょ? それを強要して聞き出そうなんて私は間違ってると思う」

「こなた……」

「私もそう思います。無理強いは良くないですから」

「そう……だよ。無理させちゃダメだよ」

みんな、そう思うんだ。

かいと君を助けたい、でも彼がどうしても話したくないのなら無理に聞かない。

そうよね……。

「私も、聞かないわ。いつかかいと君が話したいと思うまで待つ」

かいと君は少し躊躇った顔を見るとまた顔を上げて言った。

「ありがとう……」

彼は、泣いていた。

かいと side

ホント、自分が嫌になる。

コイツらにこんなにも信頼されているのに話すこともできないなんて。

「かいと君、私達が軽蔑するとか“そんな悲しいこと言わないでよ”。私達はいつでもかいと君の味方のつもりだからさ」



「そうそう。だからそんな不安がらなくていいんだよ」  
「かいと君は大事なお友達だもん。離れたりしないよ?」  
「ええ。ずっと傍にいます」

そうか……。

オレの望んだモノはずっとオレの手の中にあっただ。

なのにそれを見落として、

突き放して、

また、失おうとして……。

本当にバカだ……。

でも、今は違う。

オレの目の前にある。

だから……

「友達に、なってくれるか? もう一度……」

少女達は、見合って笑い、そして言った。

「おkおk、どんと来い!」

「バーカ、縁切った覚えはないわよ」

「よろしくね、かいと君」

「また、これからも仲良くしましょうね」

そうだ……。

コイツらは、

オレにとって

救いの

天使だったんだ……。

オレの物語はまだ終わりじゃない。

だって、これは

まだ、

不幸の物語の、序章だったのだから……。

桜が散り始めて（後書き）

さーで、次回のらき すたは？

4月も残り一週間。

来たる4 / 2 6 って一体何の日だっけ……？

次回、『4 / 2 6 かいと怒濤の誕生日編』  
「ちよつとした余興」

## ちよつとした余興

4月もあと僅か。

すっかり桜も散り、校庭の桜の木々は少しだけ寂しげに見える。

オレたちが縁を切ってしまうという事件は未遂で終わり  
こうしてまた穏やかな日常が戻ってきた。

いつも通りの長ったらしい授業も終わり、一つ伸びをして欠伸を放つ。

「はあ。流石進学校だなんて思うときがあるぜ……」

「そうだよ。私なんて黒井先生にゲンコツされた……」

いや、こなた。それはお前が悪い。

っ！か今時寝てる生徒を殴って起こす教師はいるのだろうか？

そんなことを思いつつ、教科書やらを鞆に詰める。

「でも難しい授業だと先生が外国語話してるように聞こえない？」

「あー、それすっごい分かるよ！」

こなたとつかさはがっしりと手を握り合う。

なんだこのノリ。

「そっぴやみゆきはいつも授業に集中してるよな。なんかコツとあるのか？」

「いいえ。私は寝ないと駄目な方なので11:00には寝てしまいます。ちなみに2年生までは10:00には寝ていました」

ダメだ！

これは人生損しているようで真似できん！！

かがみとも合流し、学校を出る。

「もう4月も終わっちゃうな」

「そうだね。なんだかんだで色々あったしねえ」

「そうそう。こんなバタバタした一月なんて初めてよ……」

「そうだね。いっぱいあったね」

「ええ。少し楽しかったかもしれないね」

すっかり爺臭いムードになってしまった。

「そういえば、かいと君で誕生日いつ？」

そんな空気を打ち破るようにこなたはオレに尋ねてきた。

「誕……生日？」

誕生日……

「あ……………」

絶叫。

「ちょ！ 何！？」

「誕生日……明後日だ……」

「忘れてたのかい！！」

そう。かがみのツツコミ通り、オレは自分の誕生日を忘れてしまっていたのだ。

なにせ、この一ヶ月は色々なことがありすぎたからなあ……。

つまり、明後日でオレは18になるということだ。

「そうなんだ。じゃあかいと君のお祝いしないかね！」

つかさはにつこりと笑った。

「そうね……。せっかくだし、ミニパーティでも開いてパーツとやりましょう？」

かがみも乗り気なようでオレに目配せをする。

「そう、だな……。たまにはいいかもな！」

むしろパーティなんて大感激だ。

「ですが……準備期間も短いですし、急がないといけませんね」

「あー、そうだね……」

「ははは。そんな時はオレも手伝うよ」

「……意味ない（よ）（です）……！」「……」

こなた達はともかくつかさやみゆきにまで怒られてしまった。

プライドだろうか？

第一、かがみは料理得意じゃないのに……。

「失礼なこと考えてない？」

「イエ、ナニモ」

何故オレの周りには勘の良いヤツばかりいるのだろうか。

まあ、そんなこんなでパーティの日程やら人集めやらはこなた達が段取りしておいてくれるというのでオレにはなんらすることはない。ここまでやって貰うんだ。

アイツらの時もパーツとしてやらないとな。

まあオレがアイツらの誕生日を知らないことは後に知った事実であるが。

オレは明後日に行われる『かいと君聖誕祭（仮）』（こなた命名）に胸を躍らせつつ、今日の夕飯は何にしようかなどと思い、傍にあった適当な安いネギを買い物がこに入れるのであった。（長いぞ、この一文）

「ただいまー」

何故だかこなた達と出会ってからこう言うことが増えた。

別に言ったからといって返事がくるわけではないが、ついか返ってきたら怖い。

適当に鞆と上着を放り、冷蔵庫を開けていくつかの食材を見回す。

「さて、今日は何にするかな……」

「この食材だとカレーとかできそうじゃない？」

「そうだな、カレー粉もあるs……」

こんな展開は前にもあったな……。

オレの隣には高校生と言うには無理のありすぎる身長を持つ友人がいた。

「またお前か……」

「んふふ。よく分かったね」

「前にもあったからな……」

ていうかこんな事するヤツはお前か強盗ぐらいだろ。

なんてツツコミはどうでも良い。

コイツには何言ったって無駄だからな。

そんなの分かりきってることだ……。

「こなた、どうしたの？」

「だ、ダメだよ、お姉ちゃん！」

玄関の方からもう2人の声が聞こえてくる。

どうやら姉妹らしく、片一方はこなたと同じく常識の一部が欠如しているヤツらしい。

どうして分かるかって？

人の家に勝手に上がるヤツに常識があるとは思えねえ！！

「おいおい、何処の誰か知らんが人の家に勝手に上がるんじゃない」

「んう？ どちら様かな？」

「あ、ゆい姉さん。紹介するね、友達の倉場かいと君。かいと君、従姉妹のゆい姉さん。婦警さんなんだよ」

「ちゃーす！ こなたの従姉妹の成美ゆいでーす！」

おい、警察官！

警察が常識持っていないでどうする！



「人の家に勝手に上がる警察ってどんな人だよ……」

「大丈夫だよ、私が許可したから」

「勝手にするな!!」

はぁ……。

溜息をつくオレの視界の端に入っただのはこれまたこなたと同じく高校生とは言い難い身長を持った少女。

「小早川も一緒か」

「はい……。すいません、先輩」

「もういいよ。この人もこなたと同種の人間みたいだから……」

「お姉ちゃん、いい人なんですけどたまにこういう事になっちゃって」

お姉ちゃん？

こなたの事か？

「もう慣れてるから安心しろ」

「でも、先輩。お姉ちゃんと会うのは初めてですよね？」

「？」

何だ？

小早川の言ってることが分からない。

そんな状況を見かねたのか、こなたはオレに耳打ちした。

（ゆい姉さん、ゆーちゃんのお姉さんなんだよ）

（姉妹？ でも名字違うし……）

（既婚者だからね。当たり前でしょ？）  
なるほど。

小早川から見れば成美さんが姉でこなたが従姉ってことややこしいな。

「というわけで、かいと君。今日は夜ご飯御馳走になるからね」

「はぁ!？」

「もーお腹ぺコぺコでさあ」

「自分の家で食ってこいよ!」

「そんな連れないこと言わないでさあ」

「そっだよ、少年！」

「だあ　　！　　こなたも成美さんもいい加減にしろっ！」

抱きついてくるこなたにはゲンコツを、成美さんにはデコピンをお見舞いする。

「うー」

「なんで私だけ……」

「初対面の人を殴れるか」

結構こなたの頭は固くて拳が痛い。

「うー、いいでしょお？」

懲りずにオレの服の端を掴んでくるこなた。

まったく……。

「分かったよ。座ってゆっくりしてろ、すぐ作るから」

「わーい！　ありがとー」

「お世話になるよ、少年！」

「えっと……ありがとうございます」

小早川……。

お前はホントに良いヤツだよ……。

こなたや成美さんのように図々しくない。

本当に成美さんの妹なのかと疑いたくなるような性格に感激しつつ、キッチンに立ち準備を進める。

しばらく料理を進めているとこなたもキッチンに来た。

「どうした？」

「んー、少し手伝おうかなーとか思って」

「そうか、助かる」

こなたは温めていた鍋に切っておいた野菜や肉を入れて炒め始めた。  
「怒ってる？」

「別に。お前の性格知ってりやどうしようもないって分かるさ」

「まあ、単純に夜ご飯たかりに来た訳じゃないからね」

「そっなのか？」

「明後日の誕生日会の会場の下見、かな？」

「会場ってウチなのか……」

「まーね。他の家は何かと都合取れなくて」

「てことはアイツらもウチに来るんだよね……」

「たまにはちゃんと掃除しないとなあ。」

そんな話をしながらカレーは完成し、4人分をリビングに運ぶ。

「ほーい、お待たせ」

「いよっ！ 待ってました！」

器をそれぞれの前に並べてオレも座る。

「じゃ、いただきます」

オレに習い、3人も手を合わせる。

「いただきます」

みんなで食べたカレーはすごく美味かった。

誕生日まであと一日

## ちよつとした余興（後書き）

さーで、次回のらき すたは？

もう4月も終わっちまうんだよなあ。

でも、4月の最後にいい思い出ができそうで嬉しいよ。

次回、

「秘密の出会いと引き金」

## 秘密の出会いと引き金

「　　」

友人達主催の誕生会を明日に控え、テンションを上げるなという方が無理難題である。

自然とオレの足も軽やかになり、鼻歌も混じる。

まあそんなことに注意を割いていて前方の注意がおろそかになってしまっていた。

「きゃっ！」

「うわっ！」

案の定というかなんというかオレはその角を曲がってきた少女とぶつかる形になってしまった。

少女は重そうな本やら書類やらを抱えてきてそんなものを持ちながらオレとぶつかった訳で後に体勢を崩してしまった。

「危ねえ！」

オレは急いで少女を抱えて起こした。

「悪い。前見てなかったから」

「いえ、私の方こそ前見てなくて……」

「前見るも何もあんなの抱えてちゃ見えねえだろ」

見たところ日本史の資料だ。

大方、次の授業の資料でも取ってきていたんだろうな。

「お詫びに運ぶよ。教室は？」

「えっと、1-Dです」

「そうか、ほら貸せ」

オレはいくつかの資料を持つとそれらを抱えて1-Dを目指した。

「あの、いいんですか？　大半を持って貰って……」

「女子にこの量はキツイだろ。ぶつかったオレも悪いんだから気にするな」

「ありがとうございます」

なかなか今時いない礼儀正しいヤツだな。

こなたにも見習ってほしいよ……。

??? side

はあ……。

誰か知らないけど、ぶつかって悪いことしちゃったなあ。

おまけに資料まで運んで貰って、失礼な後輩とか思われてないかな……。

って！

その資料の中に資料室で隠れて読んでたマンガが混ざってる！

ど、どうしよう……。

抜き取って……でも抜き取るときに絶対ばれるよね……。

だからってクラスで取るのもばれちゃうし……。

うう……。私どうすればいいのおー！？

かいとside

「？」

少女は頭を抱えてあれこれ悩んでいる風に見える。

時折、オレの方をチラチラと見てまた同じ事をくり返している。

何なんだ……？

「そ、そういえば、先輩は最近面白いことかありました!？」

「？」

どうしていきなり？

もしかして沈黙というかプレッシャーに耐えられなくなったのか？

しまったなあ……。

上級生として気を配るべきだったな……。

まあここは空気を和らげるために話に乗る方がいいかもな。

「面白いつていうか、嬉しいことならあるよ」

「嬉しいこと、ですか？」

「明日オレの誕生日でさ、友達がパーティ開いてくれるんだ。だからそれが嬉しくてさ」

「……いいですね、そういうの」

「まーな。……つてアレ？　なんか漫画本挟まってる」

「！？」

何故ここに挟まってるんだ？

資料室にあるわけないし……。

つーか、これ……

「あの……それ、私の……」

「これ……、お前のなのか……？」

「う、え、ま、まあ……その……はい」

「これ……最新刊……」

そう、最近は金穴気味で買えなかった最新刊だ。

月の暮れは援助金も少なくてオレとしては大分生活も苦しく、欲しいものが買えず我慢していた。

「お前もこれ読んでるのか？」

「……はい。ていうかあんまり大っぴらに……」

「つて、そうだな……。先生に見つかるめんどくさそうだ」

「え？　いや、あの……」

無事、資料を届け終わった。

「じゃ、漫画見つからないようにしろよ」

「あの、先輩。これ、差し上げますよ」

「……いいのか!？」

「はい。手伝ってくれたお礼です。それに……」  
「それに？」

「何でもないです! 私からの誕生日プレゼントって事で! 明日、誕生日なんですよね!？」

「あ、ああ。サンキュー。えっと……」

「若瀬いずみ、です」

「そうか、オレは3 - Bの倉場かいとだ。ありがとな、若瀬!」

そろそろ授業が始まる時間だな。

次は黒井先生の授業だし、遅れないようにしないとな。

そう思い、オレは若瀬に手を振って教室へと走った。

いずみ side

なんだか嵐のような人だったな。

初対面の私にあんなに優しくしてくれて

私のことを『オタク』って軽蔑しないで

すごい良い人だな……。

「いーずみ、どうしたの？」

「さっきの先輩、どこの誰？」

「な、そんなんじゃないわよ! 偶然通りかかって助けてくれただけなんだから!」

「でもさっき何かの本渡してたじゃーん？」

「だーから! そんなんじゃないってばー!」

確か、倉場さんって言ってたっけ。



機会があつたら、話してみようかな……。

そんな春の日の出来事

## 秘密の出会いと引き金（後書き）

さーて次回のらき すたは？

1年の教室から3年の教室って結構遠いんだな……。  
おかげで黒井先生のゲンコツをくらったぜ……。

さーて、今日もまた昼飯昼飯と……。。

次回、

「誕生日会！ ……のちよつと前」

誕生日会！ …… のちよつと前

「かいとくくん、お昼食べよ」

「あいよ」

いつも通り、こなたはオレの席に椅子を寄せて弁当をひろげる。

かがみ、つかさ、みゆきも揃いようやく昼飯タイム開始だ。

「いや、昨日は久しぶりにネットゲ以外で夜更かししちゃったよ」

「そつえば、昨日の夜は飯食ってすぐ帰ったよな。何してたんだ？」

「何言ってるの？ 誕生パーティの準備に決まってるデシヨ？」

「あー、そうだったな」

そつえばそうだ。

あんなに楽しみだったのになんで忘れてたんだろう？

ズキン

コイツはなんだかんだで料理が上手いしな。

今からでも楽しみだ。

「私もケーキ作り頑張ってるんだ」

「お、つかさがケーキ作るのか。楽しみだな」

つかさはそう言っあははと笑った。

つかさも料理は上手いな。今からでもよだれが垂れそうだ。

「私も気に入って貰えるかは分かりませんが腕によりをかけました」

「そんな謙遜するなよ。みゆきだってけっこうできるじゃないか」

みゆきはなんでもできるからな。料理も得意だろう。楽しみだ。

「ま、まあ、私もできないなりにつかさを手伝ったりとかしてるわよ」

……。

「何よ、その目は」

「アハハ、楽シミダナー」

「棒読み!？」

かがみには悪いがいまいち期待できない。

漫画の中の主人公のように黒こげの手料理を笑って食べるなんてしたくないものだ。

まあ、流石のかがみもそこまではないだろうが。

「でも、ホントにオレも手伝わなくていいのか？」

「何言ってるのよ。かいと君の誕生日なんだから。私達がするわよ」

「そうそう。かいと君が今まで見たこともないようなパーティを開いてしんぜよう」

「私も頑張るから楽しみにしててね!」

「ご期待に添えるかどうかは分かりませんが楽しみにしていてくださいね」

まったく、コイツ等は……。

オレ一人の誕生日に張り切りすぎじゃないか？

でも、こうされるのも悪くないよな……。

こなた side

ん〜。

やっぱり同年の女の子達にこんな事して貰えるなんてかいと君はつくづく罪作りの男の子だねえ。

まあ、格好いいというのは認めるけどね。

それにこの一月で見させて貰ったけど結構なフラグメイカーだしね。

それと同じくらいフラグクラッシャーでもあるけど。

でも、私が今まで男の子にこんなことしたことあったっけなあ……。

やっぱり、かいと君に何かあるのかなあ。

私達を惹きつける“何か”が。

かいと君と話してるとすごい心が温かいし。

ぽかぽかするんだよね。分かります、綾さん。

私、かいと君のこと好……なのかなあ……。

かがみ     s i d e

はあ。

かいと君、私達に馴染んでくれたのは嬉しいけど、やっぱり少しは気をつけて欲しいものだわ……。

料理下手なんて女の子にとっては死活問題なんだから……。  
もう少しオブラートに包むってことを知らないのかしら？

まあ、見てたらかいと君って女の子の扱い上手くないみたいだしね……。

仕方ないのかも。

でも、おかしいな。

料理下手なんてこなたに何度も言われてることじゃない……。

それって、かいと君が特別な人、ってことよね？ 私にとって……。

もしかして、私、かいと君のこと……。

つかさ     s i d e

えへへ……。

かいと君、私の料理のこと楽しみって言ってくれたなあ。

なんだかかいと君に言われるとすごいがんばれる気がするなあ……。

よーし！

かいと君にもつと喜んで貰えるようにもつと頑張っちゃおう！

でも、かいと君て本当に不思議な人だなあ……。

かいと君といるとすごい心強いっていうか……。

でも、それはお姉ちゃんといるときとはまた違うんだよねえ……。  
なんなんだろう……？

みゆき     s i d e

かいとさんは本当に優しい方ですね。

こんな私にも変わらず接していただいていますし。

至らぬ私でお恥ずかしいのですが、できるだけかいてさんに喜んでいただけるように頑張らないといけないですね。

かいとさんにとって私はどのように見えているのでしょうか……？

私はいとさんは特別な方だと思いますね。

ただ単に能力が優れているという意味ではなく、求心力、でしょうか？

かいとさんと話しているとき、とても心が舞い上がっているような気分になるのです。

この気持ちは一体何なのでしょう……？

かいと     s i d e

「？」

どうしたんだ？

みんなオレを見てずっと押し黙っている。

「な、なあ、どうしたんだ？」

「え？ あー、なんでもない」

「気にしないで！」

「う、うん！ 何も考えてないよ？」

「な、何でもありません！」

いや、どう考えても何かあるだろ。

みんな一斉に顔を紅潮させている。

なんなんだ、一体……？

そんなよく分からない昼休みを終えて下校時間。  
明日は休み兼誕生パーティーだ。

オレは遠足前の小学生のような気持ちになり、柄にもなくスキップ  
なんてしてみる。

「ヒヨリ、アソコにヘンシツシャがいマス！」  
「ダメだよ、パーティちゃん……。先輩に向かって変質者なんて言っ  
たらダメッス」

見られてしまったか……。

腐女子Aこと田村ひよりと腐女子Bことパトリシア・マーティンだ。

「よお、今日はお前ら部活無いのか？」  
「いえ、今日はアキバ集合ッス」  
「ワタシタチはスコシデオクれてしまったデス」  
「そうか、あんまり遊んでないで少しは勉強もしろよ？」

まあ人のこと言えた義理じゃないが。

「あー、そういえば聞きましたよ。明日先輩の誕生日らしいッスね」  
「あー、まあな」  
「というわけで私とパーティちゃんで購入したッス」  
「ホントウならパーティにもデタかったのデスが、ヨティが力サな  
ってしまったのデス」  
「そうか……。これだけでも嬉しいよ」  
「いえいえ。これくらいお安いご用ッス」  
「デハ、カイト。ハッピーバースディね！」  
「おう、サンキュー！」



そう言つて、田村とパトリシアは行つてしまった。

「さて、アイツ等は何をくれたのかなつと……」  
渡された紙袋を漁る。

どれどれ……

「『本当にあつた××なBL 百選』……」

オレの本を持つ手がぶるぶると震える。

「こんなのいるかあ

！……！」

オレの叫びが夕焼けの空に響き渡つた。

<ちなみにその後>

「やつほ、お待たせ。かいと君」

「あら？ 何持つてるの？」

「げえ！ いや、これは……」

「『本当にあつた××なBL 百選』……？」

「何でしょうか……？」

こなたとかがみはオレを見て軽蔑のまなざしを送る。

「うわぁ……。流石にそれは笑えないよ……」

「かいと君……。アンタ、そんな趣味だったのね……」

「ち、違う！ 断じて！！」

『嘘だっ！！！！』

「いや、どういう意味だよ！？」

そんな雛見 の女の子のように叫ばれても！

ちなみに誤解を解くのに30分を要しました。

誕生日会！ …… のちよつと前（後書き）

さーて、次回のらき すたは？

な、なんなんだいきなり！？

いきなり家に来たかと思えば何をして……！！？

次回、

「誕生会！ 主役放棄」

## 誕生会！ 主役放棄

「はぁ……。何すっかなぁ……」

とある市街地。

オレはそこでアテもなく歩き回っている。

誕生会当日。

なぜオレがこの日にこんな街中を徘徊しているのには意味がある。

てなわけで回想シーン

いつも通りの朝のハズだった。

「っっっ！ いい朝だな」

天気も良く、日差しも気持ちがいい。

あとは掃除をしてこなた達を待つだけ

……のハズだったんだが。

勢いよく家のドアが開き、事件はやってくる。

「この家は我々が占拠したあ　　！！」

「何事だ　　！？」

こなた事件はいきなりドアを開け、オレを外に放り投げた。  
そしてドアの鍵を閉めた。

「ちょ！　せめて着替えさせてください！」

流石に寝間着は外を出歩ける格好とは呼べない。

何とか家に入れて貰って普段着に着替える。

「で？ 何でまたオレを追い出したんだ？」

「いや、飾り付けするからかいと君には知らない方がサプライズ感あるデシヨ？」

「それでオレは追い出されると？」

「大丈夫よ。そう時間かかるモノでもないし、しばらく街の方でも回ってきたら？」

「……」

回想シーン終了

てなわけで色々と口車に乗せられて家を追い出された次第である。

家主のオレの意志は何処に？

なんて思ったが時すでに遅し。

とりあえずちらほら開いている店を回ってみるが特になにもない。

それにしても後何分かかるんだ……。

そんな感じで暇つぶしのために街中を徘徊しているわけだ。

そんなオレの視界に映るのは……アレは、峰岸か？

かがみのクラスメイトの峰岸だ。

それに、なんか男と一緒にだな。

……手を繋がれていらっしやる。

これは……

「お？ 確か倉場だっけ。何してんだ？」

「うお！？ 日下部か……」

同じくかがみのクラスメイト、日下部だ。

「お、おい！ 峰岸が……」

「お？ ああ、デート中だっけ」

「で、デート？」

「そ。あやのはウチの兄貴と付き合ってたんだ」

マジか。

まあ確かに峰岸はあの性格だしモテるよな。

みゆきも同じだがあつちは驚異のフラグクラッシャーだからな……。

「それで？ 日下部はずっとあの2人を追いかけて回してると」

「別にそんなんじゃないよ。たまたま通っただけだし」

「ヒマなのか……」

「まーなー」

「じゃ、しばらく2人で暇つぶしでもすつか？」

「お、いーんじゃねえか？ ゲーセンでも行くか！」

とりあえず、この暇を潰すために遊ぶことにしたのだった。

「それにしても日下部は走るの速いな」

「まーな。これでも陸上部だし」

なんか途中で競争をしてしまったオレ達。

流石陸上部というかなかなかいい走りだったな。

オレもつい熱くなっちゃったぜ……。

「それにしても倉場もこんな朝っぱらから遊ぶなんてヒマ人だなー」

「お前に言われたくない。しかも好きで遊んでるわけじゃねえ」

「なんだそれ？」

「いや、少し家の方に強盗が押し入ったというか……圧力に屈した  
というか……」

「？」

日下部は訳が分からない、といった顔をしている。

まあ、だろうな。

遊び疲れて、そこら辺のベンチに腰掛ける。

「よっと、飲み物買ってきてやるよ。何がいい？」

「じゃあオレンジジュースで！」

「はいはい」

日下部をそこで待たせて自販機を捜す。

ここら辺にはないな……。

数分後

飲み物買っただけで随分と時間かかったな……。

見つけたと思ったら行列だったり、修理中だったり、随分と運悪くないか？

日下部、怒ってねえかなあ……。

「日下部、悪い。待たせて……って寝てる」

ベンチを我が物顔で占拠してやがる。

しょうがないな……しばらく寝かせて……

と思っていたら携帯のコールが鳴る。

「はい？」

『おー、かいと君？ 準備できたから帰ってきていいよ』

おー、バッドタイミング。

どうしよう……。

日下部を置いて帰るなんてまず無理だよな……。

「仕方ないな……。オレの家に連れ行くか」

日下部をおぶり、ゲーセンを出る。

「あ、倉場君」

「あ、峰岸」

「ん？ あやのの友達か？」

「うん。隣のクラスの人なの」  
「ども」

あ、確かこの人曰下部の兄貴だって言ってたっけ。

デート中にこんな事するのは少し気が引けるけどしょうがないな。

「あのー、申し訳ないですがこっちの曰下部さんを預かっていただけると大変嬉しいんですが……」

「あれ？ みさちゃん」

「みさお……何やってるんだ」

曰下部の兄貴はオレに変わり、曰下部をおぶった。

「ちょうど家に帰るところだったんだ。ありがとうね」

「いえ、オレの方こそ。急ぎの用があったもので」

「そう。ありがとうね、倉場君」

「ああ。じゃあ、急いでるんで」

オレは3人と別れ、家を目指し走った。

短い時間だったけど、結構楽しかったな。



**誕生会！ 主役放棄（後書き）**

さーて次回のらき すたは？

やっとパーティか。

今からでもワクワクしてくるよ。

楽しみだ。

次回、

「誕生日会！！」

## 誕生日会！！

「……かいと君（さん）、誕生日おめでとう！！！！」  
「うお！」

ドアを開けるとクラッカーやら大声やらが入り交じってなんて言ってるのかよく分からないお祝いの言葉を受けてオレの誕生日パーティーは始まった。

「5人でひっそりパーティか。寂しいな」

「むう、折角用意してあげたのに……」

「嘘だよ。嬉しいって」

実際、高校では自分の誕生日を祝うなんてしてこなかったから嬉しい。

「かいと君、ジュースだよ」

「お、サンキュー」

つかさはオレのコップにオレンジジュースを注ぐ。

その間にかがみとみゆきは次々と料理を運んでくる。

どれも美味そうだ。

オレは手近にあったチキンに手を伸ばす。

「なかなか美味いな」

「それねえ、かがみんが味付けしたんだよ」

「そう聞くと美味く感じなくなるのは何でかな」

「どういう意味だっ！」

「冗談だって。美味いよ」

「ま、まあそうね。でも、別にアンタのために作ったんじゃないんだから！」

「いや、作れよ」

ツンデレ発動は面白いが今のセリフはどう考えても誕生日会に祝う相手に言う言葉じゃない。

とりあえず次はおにぎりに手を伸ばす。

「かいとさん、お味は如何ですか？」

「ん、なかなか塩がきいてて美味いぞ？」

「良かったです」

なるほど。これはみゆきが作ったみたいだな。

やっぱり上手じゃないか。

食事も腹八分目に止め、メインのケーキが運ばれてくる。

「美味しくできてるといいんだけどなあ」

「どれどれ？」

ショートケーキだ。

お店で見るようなスゴイ感じの物でこれは味も期待できそうだな。とりあえず、フォークで一口パクリ。

「こ、これは……」

「ど、どうかな？」

「美味いぞ！」

かなり美味い！

食が進むぞ！

「流石は調理師志望だな」

「そんなことないよ」

つかさは顔を赤らめて照れているが照れることはない。

これは十分店で出されても文句なしのレベルじゃないか？

こなた達もケーキを食べて「「「おお……」「」と感心している。

「流石だね、つかさ」

「ええ。また腕が上がってるわね」

「スゴイですね、つかささん」

大絶賛だな。

軽くこれで稼げそうだ。

にしても、こんだけ食つてると喉が渴くな。

「スマン、こなたジューズ取ってくれるか？」

「はいはい、どーぞ」

こなたはオレのコップにジューズを注ぐ。

少しばかり甘い匂いのする液体を一気に飲み干す。

ぷはぁ……

……。

こなた     s i d e

あれ？

この缶……酎ハイだ!!

どうしよう。家からジューズと間違つて持つて来ちゃったよ……。

あー、かいと君に怒られちゃうなー。

しょうがないよね、今回は私が完全に悪いし……。

「あはは。こなた、これ美味しいな。もっと追加で」

「……え？」

あれ？

なんか予想外の反応。

ていうか……顔、赤くない？

まさか、酔って……ない？

かがみ達も流石にかいと君の異変に気付いたのかかいと君の顔をのぞき込んでいる。

「ちよつと、かいと君？ 顔赤いわよ？」

「どうしたのかなあ？」

「大丈夫ですか？」

「なはは、らいりょーぶだつて！」

大丈夫じゃない！

呂律回ってない！

つてかがみの視線がイタイ……。

「アンタ……まさか」

「な、何のことだかさっぱり……」

「アンタの持つてるソレ、お酒じゃないの？」

「そ、そのような事実は一切ゴザイマセン」

「……見せてみる」

かがみはゆつくりと私の方に迫ってくる。

ああ、かがみの背中から何か出てる！ オーラの物が……！！

「まーまー、よせよ。かがみ」

酔ったかいと君がかがみを止めてくれた。

セーフ。

「かいと君は話をややこしくさせるから黙ってて」

「何で？ とりあえず落ち着こうぜ」

「だから、今はこなたをどうにかしないと……むっ」

「……！？」

かがみ side

え！？ 何！？

何か唇に柔らかい感触が！

て、いうか……私、キスされてる……！？

かいと君の顔が目の前にっ！？

ああ、でもこうして近くで見るとすごい端正な顔してる……って何考えてるのよ！

かいと君の顔はゆっくりと離れて柔らかい感触も無くなっていた。

「どーだ、これで少しは落ち着いただろ！」

かいと君はドヤ顔で腰に手を当て大笑いしていた。

「ん？ かがみ、どうした？ 顔が赤いぞ」

「な、な……」

「な？」

「何するのよ、この変態があー！！」

「げふっ……」

気がつけば私はかいと君を殴り飛ばしていた。

## 誕生日会！ その後

「うおっ！ 頭痛い……」

気がつけば朝。

オレはベッドで目が覚めた。

「あれ？ オレいつの間に寝てたんだ……？」

確か昨日はこなた達が誕生日会を開いてくれて、  
上手い料理を堪能して……それから？

……ダメだ。

頭痛がひどくて思い出せない。

にしても、この頭痛も何なんだ？

とりあえず近くにあった携帯に手を伸ばし、メールを確認する。

「？ かがみから？」

昨日の夜遅くにかがみからメールが来ていたようだ。

届いたのは23時。

ということはその時間までにパーティは終わったということか。

内容は……

『From かがみ

件名：なし

本文：殴ってゴメン……。

でもアンタにだって非はあるんだから、おあいこだからね！  
とにかくあの事は私達も気にしてないからもう忘れましょ？  
じゃあね！

かが

み』

……あの事？

何だ、結局のところ一体何があったんだ？

……こなたにでも聞いてみるか。

数回のコールでこなたは出た。

「よお、朝早くから悪いな」

『いーよいーよ、気にしないで』

「早速一つ聞きたいんだが、オレは昨日の夜、かがみに何かしたか？」

『……あー。何でもないよ？』

「ちよつと待て、何だ、今の『あー』って」

『かがみが忘れようって言ってたんだから別に掘り返す事でもないんじゃない？』

「……そういうもんか？」

『そういうもんだよ』

「そうか……悪いな」

『ううん、いーよ。じゃあね』

「おう。またな」

よく分からなかったがとりあえず電話を切る。

こなたもああ言ってたことだし、もう忘れるか……。

オレはゆっくりと立ち上がり、頭痛に耐えながら結局昨日できなかった



った宿題を大急ぎで  
片付けるのであった。

大人数で過ごした幸せな誕生会の余韻に浸りながら……。

<翌日>

「よお、おはよう。かがみ」

「え！？ あ、ああ、おはよう……」

「どうした？」

「何でもないわよ！」

かがみはいきなり拳を振り下ろしてきた。  
危ない危ない。

「何を怒ってるんだ？」

「怒ってないわよ！」

「ホントか？」

この対応はどう考えても怒っているようにしか思えないが。

「かがみんは照れてるんだよ。察してあげなよ」

「うお、こなたか……」

いつの間にオレの背後に回り込んだのかこの小動物はニヤニヤと笑  
いながらオレとかがみを見ていた。

「何に照れてるんだ？」

「それは自分で考えてあげなよ」

「???」

それだけ言つとこなたはかがみとどこかへ行ってしまった。

かがみは一体、何に照れてるんだ……？

まあ、その事件もすっかり忘れて翌日にはまた仲直りしてたけどね  
！！

幸せな夢には満足したか？

……いや、まだ満足できてないようだな。

いいか？ どれだけお前が過去から逃げようとどうすることもできないんだ。

幸せの分だけ、報いは受けることになるのだから……。

そして、お前はあの事件の報いすら受けていないんだ。

次に失うのは、誰だ……？

誕生日会！ その後（後書き）

さーて、次回のらき すたは？

4月も終わってゴールデンウィーク突入だな。

久々にゆっくりできそうだ……。

って、お前いきなり何するんだよ！！

次回、『ゴールデンウィーク、波乱の大合宿編』  
「憩いとそれを壊すもの」

え？ クリスマス企画とかやってほしいの？（前書き）

問・クリスマスには何か予定はありますか？

かいと「クリスマスだからって何かすると思ったか？

ヒマがねえ！」

まさに外

え？ クリスマス企画とかやってほしいの？

「クリスマス企画      ！」

番外編    まさに外伝

「つーわけで神（作者）がクリスマスだから何かしろって言うてきたんだが……」

「はいはい！ 私はD A N Z E N美少女野球拳w」お前もやるんだぞ？」ごめんなさいやりません」

こなただって美少女の部類にはいるだろうし当たり前だ。決してロリコンじゃない、マジで。

「いいじゃない、適当に駄弁ってれば」

「そうだなー」

つーわけでフリートーク開始

「えー、何話せばいいか分からない」

「フリートーク終わったあ      ！……」

気を取り直して

「聖夜とかけまして、かいと君の生い立ちと解く。その心は？」

「それ、何かかかっているんですか？」

「おいこら、何勝手に人の過去暴露しようとしてんだ」

「それで結局何なの？」

「そこまで言われると気になるわね……」

何でもみんな興味津々なんだ！？

そんなにオレの過去が気になるのか？

ていうかそれはネタばれだから。

あと 章くらい後n……。

「せめてクリスマスっぽいこと語ろうぜ……」

「ふふん、そうやって逃げるのダメー」

くっ！ オレに逃げ場はないのか……。

「ていうか、オレが話したいと思うまで待つんじゃないのか？」

「少しくらい聞いても良くない？」

「番外編で！？ 微塵もシリアスの気配無いぞ！！」

こなたはオレの服の端を掴んで離さない。

「だー！ もうこんな企画強制終了だぁ     ！！」

そこ4人、寂しそうな顔するな！

「今はまだ話せないけど、時が来たら絶対話してやるよ。なんて言  
ったってお前らは“仲間”だからな！！」

こうしていい感じで終わってみただけ

結局このあとは追求されまくったけどね！

聖バレンタイン（前書き）

バレンタイン企画

かいと達が高2の頃のお話

## 聖バレンタイン

しんや（新キャラ）      s i d e

2月14日

一般的にはバレンタインと言うことで一際落ち着かない状況になる。  
まあこのこそばゆさが少し面白かったり。

思えばこの1、2週間ほどはいつもとは雰囲気も違った。  
男子の中には今まで何もなかったのに急に女子に優しくなったり、  
チョコ好きであることをアピールしたりなんてする者も多かった。  
見てて面白かったけどね。

ま、そんなの僕には関係ないけど。  
流石に見ているのも飽きたのでどこかゆっくりできるところはない  
かと席を立つ。

『ほら！ 立ったよ！ どこか行っちゃうって！』  
『でも……』

こう見えても耳はいいんだ。  
大抵の小声は聞こえる。  
でも関わりはしない。  
そこまで自意識過剰じゃないんだ。  
それに関わってもろくな事はないしね。

時間の浪費



それほど愚かなことはあろうか。  
いや、一つだけはある、かな……？

『ほら、こつち見てるよ！』

『あ……』

ああ……。

いつの間にかブーツとしてたかな。

その2人を見つめていたらしい。

これ以上は時間が惜しい。

そう思い直し、僕はさっさと教室を出る。

「あ、あの！」

「ん……？」

見れば先程の少女が真っ赤な顔でこちらに来ていた。  
手の中には可愛らしくラッピングされた箱が一つ。

「これ……」

少女はおずおずとその箱をこちらに差し出す。

「？」

「貰って、ください……」

僕はしばらくそれをまじまじと見ていたが  
すぐに笑顔でそれを受け取った。

「ありがとう。とっても嬉しいよ」

「あ……」

その子の顔は歓喜の色に染まる。

ま、その一言に周りの男から邪悪なオーラを感じけど。

僕はその子の頭を少し撫でてどこかゆっくりできるところ、そうだな屋上とかがいいかな。

僕は屋上へと足を進めた。

ギイ……

重々しい金属製の扉がゆっくりと開く。

少し肌寒いがゆっくりするには最適の場所だ。

ただ、あの男がいなければね。

その男はフェンスにもたれかかり、目をつぶっていた。

一瞬、眠っているかとも思えたが流石にこの真冬にこんなところで寝るバカはいないだろう。

そう思い、同じように近くのフェンスにもたれる。

「君、どうしてこんな所にいるの？」

「うるせえ」

「クラスの雰囲気こそばゆかった？　僕もだよ」

「うるせえ」

「君はチヨコ貰った？」

「……」

とうとう無視まで始めた。

その態度はますます僕を苛立たせる。

「こんな真冬にここにいるなんて結構な物好きだね」

「……」

「バレンタインに嫌な思い出でもあった？」

「……お前、目障りだな」

「どうも」

生徒は僕をギロリと睨む。

彼の不快な態度を見ていると面白い。

生徒はスツと立ち上がり、足音荒く出口へと歩いていく。

「僕は三崎しんや。またね、倉場君？」

「……」

倉場は僕の声には何も答えなかった。

アイツの性格だと僕の名前はそうそう覚えて貰えそうにないね。

僕はそう思い、ポケットからさっき貰ったチョコの箱を踏みつぶした。

## 憩いとそれを壊すもの

身体測定を終えた今日この頃。  
現在のオレ達のステータスは……

こなた テンション

かがみ 思案中

つかさ 恥

みゆき 普通

オレ 普通

となっている。

「なんで身長が伸びてない……？」

「やっぱり間食が……ブツブツ」

「うう〜」

3人はそんなことを呟いている。

「みゆきはとうだった？」

「はい。問題はありませんが少し体重が平均よりも多かったんで…

……」

いや、それは多分胸nゲフンゲフン

それはさておき、オレはなかなか順調のようだ。

去年からそこそこ伸びているし。

まあ今時身体測定で一喜一憂できるのも凄いな。

ここまでテンション上がり下がりが激しいのは大阪のオールきょじ

……

それはさておき、5月も始まりゴールデンウィークである。  
今年は6日も休みがある。ほぼ一週間だ。

それで、だ。

「ちゅーわけで、明日からゴールデンウィークや！ 先生から素敵なプレゼントを渡したるで！」

黒井先生からありがたーい課題のプレゼントが渡される。

「先生、こんなプレゼントいりません（泣）」

こなたは泣きながら挙手する。

確かにこの課題は多いな。

終わらない訳じゃないが。

「ま、そういうわけや。節度ある休日を過ごすように！ 高良、号令！」

「はい」

みゆきの号令で挨拶し、HRは終わった。

「おゝす、帰りましょ？」

かがみのクラスもちょうど終わったようだ。

「みんなはゴールデンウィークに予定ある？」

こなたは唐突にそんなことを言った。

「オレは特に……」

「私達は家族で旅行に行くんだ」

「ええ。だから残念ながらヒマはないの」

「私も少し田舎に行く予定があります」  
なるほど。

ていうことはゴールデンウィークはほとんど遊ぶ予定はないか……。

「ちなみにこなたはみんながヒマだったらどうする気だったんだ？」

「ん？ 私はバイトがあるから元々遊べなかったけどね」

「って、お前バイトしてるのかよ」

「まゝね」

……なんだろう。

コイツがやりそうなバイトが怖いくらいに見当がつくんだが……。

「アキバのコスプレ喫茶だよ？」

「やっぱりな！ そうだと思った！！」

オレの勘も捨てたモンじゃなかった。

みんなと別れ、スーパーへと向かう。

この時間ならタイムセールに間に合うな。

オレはそんなことを思いながらスーパーへと急ぐのだった。

「ふう……。今日は妙に買い込みしまったぜ……」

微妙な達成感を得ながら家に入る。

達成したのか、これは。

まあ、そんな疑問はどうでも良く、オレはあまりの空腹を感じ急いでキッチンへ向かった。

「さて、今日は何にするかな……。っと電話か？」

携帯のコールが鳴り、オレは急いで電話に出る。

「もしもし？」

『あ、倉場先輩ですか？』

「その声は……八坂か？」

『ええ。いかにも』

こなたに続くトラブルメーカー、八坂だった。

「で？ 何の用だ？」

『先輩はゴールデンウィークとか予定ありますか？』

「いや、特にないぞ」

『じゃあ、一緒に小旅行でもどうですか？』

「小旅行……」

小旅行、ねえ……。

実際、高校になってからはそんな余裕もなかったから行ってないな。確か、中2に箱根に行ったときくらいか。

ふむ……。

「いいんじゃないか？ オレは乗った」

『お、ホントですか？』

「まあな、旅行なんて久しぶりだ。それにちょうどヒマしてたんだ」

『じゃあ、明日10:00に駅前集合でいいですか?』

「おう。あと何か用意するものあるか?」

『それじゃ、会費3000円徴収するんで。あとは好きな物でいいですよ』

「そうか。じゃあ、また明日な」

『ええ。また明日』

そう言つてオレは電話を切つた。

小旅行……楽しみだ。

翌日

指定されていた駅に来たわけだがそれらしい人影は見えない。

「えーっと……」

「先輩、こつちツスよ」

「お? 田村か」

声のする方を振り向けば田村が手を振っていた。

ちなみにこの時点で何となく嫌な予感がしたのは秘密だ。

「お前がいるって事は……ア二研絡みか?」

「ええ。ゴールデンウィークで強化合宿らしいツスね」

何の強化だ……とか思ったが田村に言つても無駄な気がしたので言わなかった。

そんなこんなで待つこと数分……

「遅いな……」

「遅いツスね……」

あと数分で電車が来るのだが、相変わらず誘つた張本人の姿が見えない。

確か八坂はこなたと一緒に遅刻癖があつたっけ……?

「ったく……。本人が遅れてどうするつもりなんだよ……」

まあ、そんなことを呟いても何の意味もなくオレは近くのベンチに腰掛けた。

「おゝ、来たみたいツスよ。先輩ゝ、こっちです」

田村が向こうの方に手を振っている。やっと来たか。

「いやゝ、遅れてすいませゝん」

「まったく……。たまきがモタモタしてるから」

つて、山辺と毒島がよっ！！

ああ、コイツらもア二研だったな……。

「お、倉場先輩。お久しぶりです」

「ご無沙汰してます」

「おう。オレも誘われたんだ。合宿中はよろしくな」

さて、あとは八坂だけだ。

あの野郎、向こうで何か奢らせてやる。

そして更に数分

あと数分で電車が出る時間。相も変わらず誘った張本人の姿は見えない。

「まだか？ そろそろ電車出るぞ」

「見えないツスねえ」

「こっちもいないです」

「電話してみましようか」

毒島がそう言った時、

「やゝ、遅れましたゝ」

「……遅いつ……！！……」

オレ、田村、山辺、毒島が見事にシンクロした。

「とにかく、怒るのは後で。とにかく早く電車乗りましよう」

何故かいる永森は落ち着いてオレたちを促した。



電車内

危なかった……。

オレが最後に乗った瞬間にドアが閉まった、間一髪。

初日からこのバタバタ感。

一体どうなるんだ、この合宿……？

オレの不安を乗せたまま、電車は発車するのだった。

憩いとそれを壊すもの（後書き）

さーで、次回のらき すたは？

不安だらけで始まったオレのゴールデンウィーク。

行き着く先は先行き不安な場所……。

ホントにどうなっちまうんだ、オレの休みは……！！

次回、

「オレと後輩と疲れる休み」

## オレと後輩と疲れる休み

「いや、寝坊はしちゃいけないと思ってたんですけど何故か二度寝しちゃって」

八坂は特に悪びれた様子もなく一人アハハと苦笑する。

無性に殴りたいんだが。

まあオレに呪いがかかっていたことに感謝するんだな。

コレさえなければ今頃八坂に殴りかかっていただろうからな。

「ったく。お前も部長なんだし、もう少ししっかりしたらどうだ？」

「まあ、コレがここの性格ですの」

「うわ、ひどっ」

永森は随分と慣れた口調で答える。

幼なじみとか言ってたし、こういうのはもう慣れっこなんだろっとな。哀れというか何というか……。

「というか、永森は何でいるんだ？」

「無理矢理こうに誘われたんですよ……」

永森は「やれやれ」と呟いて空いている席に座った。

「ひい、ふう、みい……。6人か？ てつきりこのメンツだとパトリシアもいそうな気もするんだが……？」

「あー、パティはゴールデンウィーク中はバイトらしいッス」

「『シフトをイれすぎまシター』って笑ってたもんねえ」  
なるほど。

確かパトリシアは留学して一人暮らしだったな。

一人暮らしの大変さはよく分かるさ。

さて、だ。

「なあ、八坂。どこに行く予定だ？」

「えつとですね、どこかの山奥の旅館です」

.....

ソレダケデスカ？

「いや、雑誌見てたらすごい景色がいいみたいで行ってみようかな」と

「ホントにただの小旅行じゃねーか。合宿の話はどうした？」

「だって体裁悪いじゃないですか」

はあ.....とオレは溜息をついた。

八坂がまともな提案をしないことくらいとうに分かっていたことだったのにな。

「と、いうわけでこのゴールデンウィーク楽しんじゃおー！」

「「「おおー！！」」」

どうやらオレ、永森、毒島を除く3人は遊ぶ気満々のようだった。

まったく.....。六日間もコイツらのお守りをしないといけないのか。本当に疲れる旅行になりそうだな.....。

なんて後悔しても遅く、電車は目的地に近づきつつあった.....。

1時間後、

「やっと着いたか.....」

オレたちが降りた駅はそこそな田舎の中心のようだ。

見渡す限り畑やら田やらが見える典型的な田舎の景色だった。

「ここは空気もきれいですね」

永森は一つ深呼吸をした。

まったくだな。あっちの街中とは違うな。

「やさこ、旅館ってどこ？」

「はいはい、えつとここからタクシーで10分くらいかな」

「じゃあ、私はタクシー呼んでくるから」

毒島はさっさと駅を出てタクシーを捕まえに行った。

「いや、なかなかいいところツスね」  
「そうだな。景色も綺麗だし、結構いいところなんじゃないか？」  
「ここは祖母の家の近所に似てるな。」  
「なんだかんだで1年くら帰ってないけど、どうなってるかな。」  
「今度電話でもしてみるか。」  
「そんなことを思っているとタクシーが来たようで急いでオレたちは乗り込んだ。」

山道に揺られて10分程……  
目的地と思われる旅館に着いた。

「これはまた、凄いな……」

どう見てもこの山中に不釣り合いだろという感じの旅館だった。  
どうも最近できたところのようだった。

「ささ、行きましょう！」

八坂を先頭にオレたちはとりあえず中に入る。

ロビーもなかなか広く、ソファやテーブルやらが結構な数で置いてある。

オレは空いているソファに腰掛けた。

「やっとかつろげるな……」

「まったくですね」

永森も大分疲れていたのかオレの横に腰掛ける。

「にしてもここに来るまですごい大旅行だった気がするんですが……？」

「それはオレも同感だ」

田村もオレと同じ気持ちのようだ。

まあ、誰のせいで疲れたかは言わないが。

しばらくしてお店の人に案内されオレたちが泊まる部屋へ。

「おお、広いな」

「まあ、この人数ですし大部屋じゃないと狭いでしょ」

「おお、眺めもいい！」

窓から見える景色もなかなかで来た価値はあったかと思った。

で、まあここまで来てやつと気付いた違和感。

「ちよつと待て八坂。お前まさか部屋を一つしか取ってないのか？」

「そうですけど……。何か問題デモ？」

八坂はぼきゅつと首をかしげる。

「大問題だっつの」

「大丈夫ですよ。先輩がそんな変な事するわけ無いでしょ？　ねえ、

みんな？」

「……するわけ無い（ツス）……」

何？　オレそんなに甲斐性のない男だと思われてるわけ？

「それにもし学校側にばれても私達は助かりますし」

「うおお、コイツ悪魔のような考えしやがる」

「まあまあ、たった五日間ですし大丈夫ですよ」

「何を根拠に！！」

まったく、コイツらの自信は一体どこから来るんだ？

まあ、こうなったものはしょうがないよな。

コイツらもこなたと同じで一度決めたら考えなんて改めないだろうし。

いつの間にかオレに諦め癖がついてしまったようだ。

でも、コイツらと一緒にしてたのもなんだか面白そうだし悪い気はしないな。

オレはなんだかんだで大勢でいるのが楽しくなってきたようだ。

だって、コイツらと馬鹿やっているときは、

嫌な記憶も、忘れることができるから……。

オレは一瞬浮かんだ『忘れたい過去』を吹き飛ばすように窓の外の  
景色を眺めた。

## オレと後輩と疲れる休み（後書き）

さーで、次回のらき すたは？

やっと旅館に着いたな。

まったくあいつ等、電車内で騒ぎまくりやがって。

おかげで冷や汗かきまくりだったぞ……。

そつえばここの旅館って温泉あるみたいだな。

次回、

「温泉といえばフラグ」



## 温泉といえばフラゲ

合宿1日目の夜。

一日の疲れを落とすためにオレたちは旅館の名物の一つ、温泉に入ることにした。

この山から出た天然温泉のようで何でも美容効果があるとか。それで女子連中ははしゃいでいるわけだ。

まあ、なんだかんだ言ってコイツらもそれなりの『年頃』なんだそうだ。

「そつえば、この前かがみがダイエットしてるの聞いたんだけどさ。お前らもそういうの気にしたりするわけ？」

「当たり前ですよ!!」

「女の子にとっては死活問題です!」

「気にしない人なんていないですよ!」

「女性が一度は通る道です」

「怠っちゃ負けッス!!」

計5名に大声で叫ばれた。

かがみもコイツらも太つてるとは言えないようなんだがな……。なんでそんなに気にするんだろうな。

「はあ。先輩は女心が理解できない鈍感な方だったんですね……」  
八坂の一言にみんな納得してしまつたのかうんうんと頷いている。  
オレは男だから理解できないのは当たり前だ。

「ていうか、そこまでしてダイエットする意味あんのか？」

「それは大ありですよ」

「女の子は男の子にカワイク見て貰いたいものなんですよ」

「人は中身って言っても第一印象は外見ですしね」

「外が悪けりゃ、中を見てくれる人もいないッス」

「ふん……。オレは別に普通にお前らのこと可愛いと思うけど?」

あれ？　なんでみんな顔が赤いんだ？

何か変なことでも言ったかな……？

「なあ、どうした？」

「な、なんでもないです！」

「さ！　行きましよう！！」

「？」

よく分からんが元気ならそれでいいか。

女子連中と別れ、一人男湯の暖簾をくぐる。

しかし、入り時ではないのか入浴客はまったく見えない。  
オレの貸し切り状態だ。

さて、ある程度説明させて貰おう。

ギャルゲーなどにおいて旅行というのは非常にフラグの立ちやすい  
状況であるということ。

そしてその目的地が温泉であることで確率は跳ね上がる。

更に、だ。現在、この温泉に客はいない。

絶好のフラグ建設状況だ。

しかし、オレは忘れていた。

まさか、現実でそんな事が起こるとは考えていなかったからな……。

カポーンといかにもな効果音が流れる。

なんだこの音は。

「しかし、絶景だな」

現在、オレは露天風呂にいる。

ここからみえる風景は部屋とはまた違って風情がある。

男湯と女湯を隔てる柵。

『修理中、触れないでください』というプレートが掛けられている。

オレはゆつくりと柵から離れた。

こんなところで死亡フラグなんぞ立てたくないからな。

オレはしばらく周りの風景を眺めながら温泉を堪能していた。

やまと side

先輩と分かれて女湯へと入った私達は早速、この旅館の目玉である露天風呂へ向かった。

「おおー！ なかなかだね」

流石のこうもこの景色に感動したのかあちらこちらを眺めては頷いていた。

「いやー、みんななかなか可愛らしいおっp……痛あつ！」

「何考えてるのよ！ セクハラじゃない！」

私はこのの脳天に拳を叩き込んでいた。

長年の付き合いからしてこの性格はよく分かっている。

景色は景色でも別のものを見ていたのね……。

そんなこうは放っておいて私達は温泉へと浸かる。

「はー、あつたかあつたか」

「ホントツスねえ。あつたかあつたかツスよ」

「あんた等2人、もう少し自重しな」

あっちの問題児2人は毒島さんに任せて大丈夫そうね。

久しぶりにくつろげる、と思い私は思いきり足を伸ばしたのだった。

かいと side

流石にこんだけ浸かっているとほせてくるな……。オレはゆっくりと立ち上がり、更衣室を目指した。

「ま、何事もなく良かったな」

実際、オレも何が起こるかと不安だった。

何せ、死亡フラグが何時立ってもおかしくない状況だったのだから。オレは無事この修羅場をくぐり抜けられた事に安堵の溜息を漏らしながら部屋へと向かった。

女子連中はまだ温泉だろうし、早めに戻って一人ゆっくりするのもいいだろう。

そんなことを思いながらドアを開けたのだった。

『あ……』

「え……？」

イツツア 着替えたいむ。

全員が着替える手を途中で止め、真っ赤な顔でこちらを凝視している。

なるほど。さっきのはこれの複線だったわけだな。

「なんだ、そういうことか。騙さー」じぶうつー！ー！」

何か固い感触が額に当たったと思ったとき、オレの意識は闇に沈んだ……。

## 温泉といえばフラゲ（後書き）

さーて、次回のらき すたは？

いてて……。

なんだ……？ なんかアゴ痛いし。

つーか、ここどこ……？

次回、

「記憶、その断片」

## 記憶、その断片（前書き）

スランプ中ですいません

合宿編はこの回でおしまいです。早いな！  
ちなみに次章に続きます。

まあ大体の理由は続きが思いつかn……  
ではどうぞ。

## 記憶、その断片

「……？」

オレは気がつくとも布団の上に横になっていた。  
なんでこんなところにいるんだ……？

確か昨日はこの旅館に来て、  
それから温泉に入って……  
部屋に戻って、それから……なんか桃源郷を見た気がしたんだが……。

桃源郷……。

女子連中のはd……

……ヤバイな。

顔から火が出そうだ……。

そうか、なんてタイミング悪かったんだオレは……。

コイツらが起きたら謝つとかないな。

オレはコイツらを起こさないようにそっと立ち上がり、備え付けの  
ポットからお湯を注ぎ、緑茶で喉を潤した。

数分経って全員が起床したところでオレはDO・GE・ZAしてい



た。

「昨日は誠に申し訳ゴザイマセンでした」

「あー、いや、あのー私達もタイミング悪かったですし?」

「いや、ホントにスマン。何でもする」

「ホントですか?」

……今、一瞬目の色変わったぞ。

「何でも”する”ですよね?」

「ああ……なん……でも」

何でもやってやるさ……

さて、だ。

そもそも、浴場で着替える場所があったのに何故アイツらが部屋で着替えていたかという疑問だが。

何でも、温泉に行った方がいいが着替えのための浴衣を忘れてしまっていたらしい。

それで部屋に戻ってもオレはいなかったため、戻ってくる前に着替えてしまおう、と考えたがタイミング悪く、オレが来室してしまっただというわけだ。

よく分かったかな?

そして、場所は変わって近くの山の見晴らしのいい場所。  
山の一角にあり、柵の向こうには平和な田園が見えるいい場所だ。

「いや、絵に描いたような場所ッスね」

「ホント、漫画の舞台みたい」

「ささ、先輩。よろしくおねがいします」

「……了解です」

オレは何故か敬語になり山辺から小冊子を受け取る。

「なんだ、これは？」

「台本ですよ」

「何の？」

「漫画のです」

「はあ？」

「どういうこっちゃ。」

とりあえず、中身は大丈夫なんだろうな。

パラパラと流し読みする。

「大丈夫ですよ。Rで18なのではないです」

「よかった……」

ほっと安堵の溜息。

「今度の夏コミの案ですよ。先輩に再現して貰ってより臨場感を出

そうかと」

「臨場感で……」

でも、これ男女一組みたいなんだが……。

「そこはやまとお願ひするんで」

「んなっ!？」

永森が驚きの声を上げる。

「聞いてないわよそんなの!」

「だって言ったら怒るでしょ」

「当たり前じゃない!」

永森、その気持ちはよく分かるぜ……。

実際オレも怒りたい気分だ。

「っゝ! 今回だけよ……」

どうやら負けたらしい。

ゆつくりとこつちに歩いてくる。

「悪いな。終わったらジューズ奢るから」

「ありがとうございます」

さあ、とつとと終わらせるか!!

舞台は田舎。

2人は兄妹。

オレはそつと永森の手を握り、優しく問いかける。

『この村は、好きか?』

『……好き、です』

『そうか、俺も好きだよ。こんなに狭い村でも2人でいられるから』

『はい、ずっと……一緒』

『お兄ちゃんと、一緒』

ゾクッ

「はっ……はっ……!!」

「あの、先輩？」

やまと side

先輩は目を見開いたまま、私を見ている。  
どうしたのかしら。

「あの……」

「い、やだ……」

「え？」

嫌？

いったい何が？

他のみんなも先輩の異変に気付いたようでこちらに駆け寄ってくる。

「どうしたの？」

「いや、先輩が……」

先輩はゆっくりと後ずさり、尻もちをついた。

「頼む……許して、くれ……!!」

「？ 許す、って何をですか？」

田村さんが先輩の肩に手を伸ばした。

その行為に先輩はビクンと身体を震わせて更に後に下がった。

「やめろ……やめてくれっ!!」

先輩は頭を押さえて地面に横たわった。

「先輩!？」

「ちよ、何があつたの!？」

もう、こんなことをしている場合じゃない。

私ところは急いで旅館に向かい、手助けを呼んで先輩を旅館に運んだ。

響く声は

ドクッ

「はっ……！」

オレは目を覚ました。

そうか……。

確かア二研の合宿旅行の付き添いに行つて、それから倒れて帰ってきたんだっけ……。

少しボーッとするな。

水でも飲むか。

オレはそう思い、台所へと向かった。

たつたゝ行空いただけだが、ゴールデンウィークは終了した。  
そういうことにしてくれ。

「やほゝ。かいと君、ゴールデンウィーク中は大変だったらしいねえ」

「うるさいな」

こなたはニマニマ笑いながらオレを小突く。

「だいたい、誰から聞いたんだ？」

「ゆーちゃん経由でひよりんだよ」

「そうか……」

そつえば、何故オレは倒れたんだっけ……？

なんか倒れる前後の記憶がないな……。  
確か、田村の漫画のモデルをして……それから……。

それから……？

朝から脳裏に響く幼子達の声。

オレを、兄と呼ぶ声。

オレと呼ぶ声。

懐かしい声。

「っ！」

頭痛のする頭を押さえながらオレはこなたと共に教室へと向かう。

オレとこなた以外のメンバーは揃って話をしていた。

「よっす」

「おはよ」

「ああ、おはよう」

「2人ともおはよう」

「おはようございます」

ほんの少し顔を見なかっただけなのにだいぶ間が空いたように感じられる友人達の顔。

「いや、まだ五月だけど暑くなったねえ」

「ホントよね。私なんて休み中は半袖で過ごせたわよ」

……こんな、普通の日常なのに。

オレは、何を望んでいるんだ？

昨日から頭痛と共に脳裏に流れる過去の記憶。  
オレの、罪の記憶。

コイツらがオレの過去を知ったとき、どうする？  
コイツらだけじゃない。

みんな、3年になって知り合ったみんな。  
もし、オレから離れていたらどうする？

いや、きっと離れていくだろう。  
軽蔑されるだろう。

オレは、怖い。

一人になるのが、怖い。

もう、慣れたと思っていたはずなのに。

一人が今まで普通だったのに。

オレは……

「かいと君？」

「どうしたの？ ボーツとして」

「ちよつと変よ？」

「具合でも悪いんですか？」

「あ……。何でも、ない」

「「「「「？」「」「」」」」

本当なら、オレが触れていいはずがなかった。

いつか、あの時のようになってしまっんじゃないか……。

クソッ！

オレは……オレは……！！

ふとHRの予鈴が鳴り、我に返る。

また発作が……。

「っと、私はそろそろ戻るわね」

かがみは立ち上がり、隣のクラスへ戻っていった。

その後もオレはずっとうわの空だった。

授業はもちろんこなた達の声も聞こえないし、昼食だってロクに食べられなかった。

いつもと調子が違うオレに流石におかしいと思ったらしく、こなた達はオレに

「大丈夫？ 今日はずっとボーッとしてるみたいだけど」

「やっぱり大丈夫じゃないんじゃないの？」

「どうかしたの？」

「もし体調が悪いようでしたら保健室に行った方が……」

コイツらに、迷惑はかけたくない。

オレの秘密を知れば、きつと重荷を背負わせてしまう。

そんな思いはさせたくない。

だから、このままでいいんだ。

そう、このままで……。

このままで、いいんだ……！！



## 休み明けの地獄

ゴールデンウィークの事件から二日経ち、すっかり心を入れかえたオレはいつもどおりの朝を迎えた。

いつも通りというのはもちろん、いつも通りの時間に起床し朝食を取って準備をして駅へ向かう。

そしてその途中でこなたと小早川を誘い、途中の駅でかがみとつかさを拾う。

あとは学校付近でみゆきと落ち合う。

あとは小早川をと分かれてオレたちの教室へと向かう。

まあ、ここまでは同じだ。

教室へ向かう途中には学年の掲示板が存在し、そこで最近のイベントなんか張り出される。

かがみはふと一つの項目に目をとめた。

「月曜日から休み明けの実力テストよね。こなたはちゃんと勉強したのかしら？」

いつもこなたにからかわれている腹いせだろうか、妙にいい顔をしながらかがみがじりじりとこなたに迫る。

こなたは冷や汗をかきながらふいと顔をそらす。

まあ、こなたは絶対に勉強してないな。

アイツがテストごときに精を出すなんてないからな。

ましてやゴールデンウィーク中はゲームばかりしていただろうし、テスト勉強なんてしているわk……

「実力テストお！？」

オレは掲示板を凝視する。

そこにはでかでかと来週の月曜日と火曜日の日付に実力テストと書かれていた。

オレの大声に驚いて4人はおろか周りにいた生徒や教師もオレを見ていた。

「あのく、かいと君。そんな大声出してどうしたのかな？　かな？」

「実力って……月曜から……？」

オレはわなわなと手を振るわせて何度も掲示板と携帯の日付を見る。間違いなく、今日は実力テスト三日前だ。

「アンタ……まさか……」

「忘れてた、とか？」

「そのまさかのようなのですが……」

4人とも、オレを同情的な視線で見ている。

どうでもいいが、こなたやつかさになんか顔されるのは腹立つ。

それはさておき、だ。

『ゴールデンウィーク中はいろいろあつて勉強してるヒマなんてありませんでしたー』

なんていい訳通用しない。

常日頃から勉強しておけばいい話だからな。

というか、そんなこと黒井先生に言えば殴られそうだ。

「じゃあ、ベタだけどまたみんなで勉強会するのは？」

こなたさん、鶴の一声。

まあ、こなたの場合はゴールデンウィークで終わらなかった宿題を終わらせただけだろうが。

だが、なかなかいいアイデアだ。

テストの前の土日もあるし、今回も頑張ればなんとか間に合う。

てなわけで、放課後。

ごちゃごちゃしていた部屋を片付けてできるだけ勉強のできる環境にする。

ちなみにゲーム関連はこなたの手の届かない所に置いてある。文字通りにな。

まあ、なぜまたオレの家なのかは前回と同じであり迷惑がかからないからだ。

だいぶ片付けも済んだところでタイミングよくインターホンが鳴る。急いで玄関へ向かい、ドアを開ける。

既に4人揃っているし、これならすぐに始められそうだ。

「と、いうわけでとりあえず休み中の宿題を見せてくれないかな？」  
この小動物は予想通りというかなんというかやはり宿題を写しに来たようだ。

「私もできるなら見せて欲しいな」

えへへ、と笑いながらつかさもこっちを見ている。

その様子だとかがみには断られたみたいだ。無理もないか。

若干の罪悪感を感じつつも宿題は写させなかった。

なぜオレが罪悪感を感じなくてはいけないのかと思ったのだが感じたものは仕方ないのである。

とりあえず、勉強会を始めるが思った通りこなたは30分もしないウチに立ち上がり、オレの本棚を物色し始めた。

ラノベのスペースを避けているのは気のせいではないだろう。

「お前さ、今さら思ったんだけどラノベとかは読まないのか？」

少し余裕ができたので伸びをして、立ち上がりこなたと同じく本棚を見る。

目についた一冊を抜き取り、適当に流し読みする。

「こなたはラノベは読まないのよね。漫画とアニメしか見ないのよ」「へえ。意外だな」

かがみがニヤニヤ笑いながらこなたを見るのに便乗してオレもこなたを見る。

こなたはバツの悪そうな顔をして一冊の漫画に顔を埋めた。

「むう。見るものが多いからなかなか読めないだけだよ」

「オレはお前と同じくらい見てるけど普通に読めるぞ」

「ぐ……」

その後、熱くなつたかがみも交えてラノベの良さなんかを熱弁したのだが何故かみゆきが落ちてオレの棚にあったラノベを何冊か読み始めた。

やっぱり勉強のできる人はこんなぎりぎりに勉強しなくてもいいんだな……。

あの才能が憎い!!

その間、つかさは一生懸命取り組んでいたようだがほんの少ししか進んでいなくてつかさの手助けに随分と時間を食った。

気付けばとつくに6時過ぎ。

あまりに入りこみすぎて時間が経つのを忘れてしまったらしい。

「遅くなっちゃったなあ。帰るとき大丈夫か？」

いくらなんでもこんな遅い時間に女子を帰すのは危ない。

少し手間になりそうだが送っていくしかないか……。

「あー、大丈夫だよ。みんなここに泊まるから」

「ああ、それなら大丈夫か」

オレは座り直し、つかさの課題を見る。

「つて、ちよつと待てえい!!」

妙な違和感に気付き、大声を出す。

「何？」

今のオレの叫びにまったく疑問を持っていないのか、このチビは！

「泊まるってどういうことだ!!」

「泊まるというのは自分の家じゃなくて別の場所で一夜を明かすという事だ」そんなことを聞いているんじゃないし!!」

みゆき、それは天然なのか！ それとも狙ってるのか!?

オレが聞きたいのはそういう事じゃなくてだな！

「何でオレの家に泊まるのかって事だよ!!」

「だってできるだけたくさん勉強したいじゃん？」

勉強してなかったらどうがお前は。

「ったく……。そういうことだったらかがみとかが止めそうなモンなんだがなあ……」

「だって、面白そうじゃない？」

かがみはときどきこういう事考えるからなあ。

運が悪かったというか……。

つかさもみゆきも乗り気みたいだし、今さら追い出せもしないだろう。

「だから今日のお前らの荷物は無駄に多かったのか……」

「ナイス推理！」

こなたはGJ!と親指を立てている。

腹立たしい。

「つーか、家に5人分も食材ねえよ」

近々買い出しに行こうと思っていたからこの5人の腹を満たすほどはないだろう。

特にかがみ。

「何か変なこと思った……？」

「何でもないです」

かがみが鬼の形相でこちらを睨んでくる。

ホント勘が良いよな。

しかたないな。少し遅いがスーパーに行けば何とかなるだろう。

「オレ、ちよつと買い物に行ってくるから。お前らは待ってる」

「あゝ、それだったら私も行くよ」

「あ、私も」

「私もいつしよに行くよ」

「私もご一緒させていただきますね」

うん。

まあいいや。

## 一夜と興奮

「あー、お腹いっぱい」

かがみは満たした腹をさすりながら言った。

あの後、急いでスーパーに行ったオレ達は何とか残っていた食材を買って夕食にありつけた。

どういうワケかオレが作ったのだが。

アイツら（かがみ除く）も料理できるだろうに……。

でも、コイツらに喜んで貰えたなら悪い気はしないな。

「ああ、お前ら。さつき風呂沸かしといたから先に入れ」

いくら何でも客を待たせるわけにはいかないし、男のオレの後じゃ嫌だろうしな。

「おー、じゃあお言葉に甘えて」

「あ、でも入れるのはせいぜい2人くらいだからお前らなら2回に分けないとな」

キッチンの蛇口を捻り、ざっと皿を濡らす。

居間の方ではジャンケンをする声が聞こえた。

皿洗いも一段落し、もよおしたオレはトイレに向かう。

風呂の横にトイレがあるために否が応でも風呂場の声が聞こえてくる。

『いやー、かがみんのはおつきいねえ』

『う、うるさいな！ こっちみんな！』

……なんてうらやm、恥ずかしい会話をしているのでしょうか。

アイツらが好きでやっていることだし口出しするのもアレなんだがもう少し自重して欲しい。特にこなた。

下着等を片付けるために脱衣所へ向かった。

2組目が入っているところだからかなり抵抗はあったが頑張った。頑張る必要なかったけど。

とりあえず、煩惱を生まないためにはなるべく聞かないようにしていたんだがやはり聞こえるものは聞こえる。

『ゆきちゃん、改めてみると凄いなあ……』

『いえ……そんなことは……』

……消えろ、煩惱。

こなた達もそうだが、この家にオレがいることを忘れないで欲しい。男には結構キツイぞ。この状況は。

「ふう……」

2組目も上がり、ようやくオレの番が来た。

まったく、オレの精神力が強かったからよかったもののそのらの男だったら理性なんかとうに吹き飛んでるぞ……。

そこら辺のこともアイツらには一度言っておく必要があるかな……。そんなことを呟いてうんうんと頷くオレは決して怪しい人物ではない。

「ふう。さっぱりしたなあ」

まだ火照る体を団扇で扇ぐ。

この時期の風呂上がりは暑いな。

「かいと君、おかえり」

「またお前は……」

こなたは何をやっているかと思えば勝手にゲーム機を取り出してかがみとピコピコやっている。

かがみ、なんでお前までやっているんだ。



「な！？『こなたが一戦だけしない？』とか言っからしてやった  
だけよ！！」

「既に10戦くらいやっているみたいだが……」

「かがみはこのテのゲームはやるらしい。」

「こなたには遠く及ばないみたいだが。」

「どうでもいいけどテスト前って事を忘れてないか？」

その後、しばらく勉強会を進める。

そして時間は経って10時過ぎ。

オレにとって眠るのにはまだまだ早いがかさは既に「ぐっぐりぐっぐり」と船を漕ぎ始めている。

その横ではみゆきも眠そうな顔をしている。

「つかさもみゆきも眠そうだし、そろそろ寝るか？」

「んゝ、そだね」

「そうね。明日もあるんだし早く寝ましょ」

テーブルを端に避けて布団が敷けるスペースを作る。

「ココで寝るのか？」

「だって他に眠れる部屋無いでしょ」

「ごもつともです」

当たり前だが家賃4万のこの格安アパートにはキッチン、居間、風呂等の水回りくらいしかない。一人暮らしだからいいんだけど。

「でも、オレが一人でベッドで寝るってのもな……」

「みんなで寝たいの？」

「そういうのじゃなくて」

つかさがこんな解答したのは天然なのか寝ぼけているのか。

ちなみにみゆきは布団を敷いた時点ですでに夢の世界へ旅立ってしまった。

つかさとみゆきは眠ってしまったがオレ、こなた、かがみの3人にとって夜はまだまだ浅い。

とはいえ、電気を付けてしまっただけでは2人の眠りを妨げてしまいかねない。

だから勉強もできない。

だから適当に雑談をすることにした。

「お前らと会って一ヶ月とちょっとが経ったわけだな」

「まだ、お互いの腹の内も分からない状態だけどネ」

「腹の内ってアンタ……」

まあそうだよな。

分かると言っても相手の性格とか表層的な家庭の事情とかそういう類のものばかりだ。

「それはそうと、つかさもみゆきさんも無防備だよネ。男の子の部屋でぐっすり眠っちゃうなんて」

「またアンタはそんなことばかり……。まあ、かいと君だから大丈夫だとは思っただけ」

オレはそこまで甲斐性のない男だと思われているのか……。  
少し悲しいぞ。

「そういうのじゃなくて、かいと君を信頼してるって事でしょ」

「……何だそりゃ」

「かいと君は私達が嫌がる事なんてしないもの。だからじゃない？」  
……。

まあ、意識してるつもりはないんだけど。

確かにコイツらが嫌な思いをするのはお断りだ。

それが守れるなら、なんだってやってやるさ……。

もちろん、そんなこと気恥ずかしくて言えないけど。

「さて、私達もそろそろ寝ましょ？」

「そだね。もうやることもないし」

「そうだな。おやすみ」

もそもそと布団を被り、目を閉じる。

そうだ……。

オレは、みんなでこうしていられるんだ……。

幸せな思いを噛みしめながら、オレはゆっくりと眠りの世界へ落ちていった……。

## 明日があるさ

「ん……？」

不意に感じる衝撃に目を覚ました。

とりあえず手探りで時計を探すが辺りにはない。

ふにつ

……？

なんだろう。

何かスゴイ柔らかい。

何だコレは。

「んん……」

誰かの声と共にその柔らかい何かが動く。

いい加減その何かを確かめるために掛け布団をめくりあげる。

「何だこゝろ　うげっ！？」

オレが触ったもの……

それは、男の浪漫です。（御想像にお任せします）

みゆきはオレが触ったのにも関わらず、すうすうと寝息を立てている。

後で謝っておくか……。

とりあえず時計を見るとまだ6時。

平日ならば遅刻で騒ぐのだが、今日は土曜日だ。

ゆっくり休める。

コイツらももう少し寝かせておくか。

起こさないように立ち上がり、そろそろキッチンへ向かう。  
さて、今日の朝飯は何にするかな……。

おっと。沸騰してる。

急いでコンロの火を消した。

それと同時にかがみがキッチンへ顔を出す。

「おはよう、かいと君」

「おう、おはよう」

目元をこしこしと擦ってる辺りまだ寝起きなんだろう。

「手伝おうか？」

「いや、それより先に顔洗ってきたらどうだ？」

「手伝うなって言いたいのに……？」

かがみはゆっくりと拳を構える。

そついうつもりじゃなかったんだけど……。

「そつじゃなくて、あんまり寝ぼけてても危ないし。顔洗って目覚  
ました方が良いだろ？ それに綺麗な顔が台無しだぞ」

「！？ そ、そつね！ ちょっと行ってくる！！」

かがみはそそくさと洗面所へ向かった。

顔が赤かったが寝起きの顔でも見られて恥ずかしいんだろう。  
オレだって寝ぼけている顔をあまり見られたくないしな。

うんうんと一人解釈して頷いているオレは怪しい人物ではない。

既に時間は7時を回っている。

流石に起こした方が良さだろう。

「ほら、起きろ！ もう7時過ぎてんだぞ！」

いくら休日とはいえここまでゆっくり寝かせてもいられない。

一応テスト前だからな。

「あと5分……」

「ふみゃ」

「ん……」

「あんた等……」

かがみはあまりのだらしなさに呆れている。

「しかし、この2人はともかくみゆきはとくに起きてそうなものなんだがな」

「……そういえばそうね」

やっぱり昨日の夜は眠そうだったしそのせいだろうか。

だが、このまま見過ごすのもいけないよな。

軽く頬を叩き、強制的に覚醒させる。

何回かその行為をくり返すとやがてゆっくりと身を起こした。

つかさはいくら起こしても起きなかったけど。

「申し訳ゴザイマセンでした」

すっかり慣れてしまったDO・GE・ZA。

いきなりすることに状況の把握ができていないような3人ではあったが知らない方が良好だろう。

「さて、こなた。朝食運ぶの手伝ってくれ」

「りょかい」

朝の定番の白飯に味噌汁。

作りたての味噌汁の匂いが鼻を突く。

「……いただきまゝす」「……」

とりあえずみんな味噌汁へ手を伸ばす。

「おゝ、美味しい」

「ええ。とっても美味しいです」

こなたもみゆきも感嘆の声を上げている。

「流石だね！　かいと君」

「いや、オレは残念ながら作ってないぞ？」

「じゃあ……」

「わ、私が作ったのよ。ヒマだったし……」

かがみは赤面して頬を掻いている。

料理が苦手って言うてるわりにはなかなか器用だったな。

「そう言われると美味しくなく感じるのは何でだろ」

「何だと!？」

オレもみゆきも苦笑である。

さて、朝食も済んだところで再び勉強会へ。

「かがみくん。ここはどうなるの？」

「えっと、そこは……」

こなたは数学の問題に苦戦しているようだ。

まあオレも同じだけど。

「みゆき。ここはどうすればいいんだ？」

「はい。そこはこっちの公式を使っですね……」

「みゆきさん。ここはどうすればいいのかな？　カナ？」

「それは、まずこっちを訳さないといけないので……」

現在は英語。これは結構難しいところなので無理もないだろう。

これはこうすればいいんだっけ？

「かいと君。これってこうでよかったかしら？」

「ああ。そこはオレもそう思ったし、あってるんじゃないかな」

「かいとくん。この年表はどうするの？」

今は世界史。

特に難しくも何ともない。むしろ一般常識といっても過言じゃないくらい有名な時代の年表だった。

「今まで目反らしてたけど、お前いつもみたいに答え写してるだけじゃねえかつ!!」

何のための勉強会だと思ってるんだ、このチビは!!

……いや、真面目に答え写してるだけでも進歩といえるんじゃないか？

つて、ええい！んなもん進歩と呼べるか！

「お前、たまには真面目に解いてみるよ」

「大丈夫だよ。私には一夜漬けがあるし」

こなたはそう言っただけで無い胸を張った。

「かいと君？それだけでこなたがどうにかなるなら私達がとつくにどうにかしてるわよ」

「……それもそうだな」

「納得してしまうんですね」

みゆき、苦笑。

ちなみにつかさはこのあと起きました。

オレたちは昼食を。

つかさは朝食とも昼食とも言えるものをとる。

今朝の残りに軽く1、2品増やしたもののだが。

昼食も済ませ、つかさも交えて本格的に勉強会を再開。

しかし、つかさは寝起きで、こなたは最初からやる気が感じられず勉強会は捗るところかむしろ滞っている。



そしてなんやかんやでとつくに9時過ぎだ。

「ふわあ〜」

つかさは大きな欠伸を連発する。

かがみ曰く、『平日ならとつくに寝ている時間』だそうだ。

「ね、眠くて……。落ちる……」

こなたは後半から異常な頑張りを見せたが普段から集中力がないためすでにダウン状態だ。

まったく……。

こんなので、大丈夫か……。今度の実力テスト……。

……明日があるさ!!

なんて思っても後の祭りだ、とこの2人に言いたかったがそんな気は起きなかった。

## 欲する者と欲さざる者

実力テストが終わり、色々あって5月下旬に差し掛かった。随分と時間をすっ飛ばしたみたいだがオレは気にしない。

テストの結果については聞かないでくれ。

梅雨が近づいてきてなかなか天気にならず、憂鬱な気分だ。しかし、そんなご機嫌斜めな天気と違ってこなたは随分とご機嫌のようだ。

「コイツのこの異常なテンションは何だ……？」

「さあ……？」

オレもつかさも首をかしげるばかりである。

ちなみにみゆきは委員長の仕事。かがみも同じくだ。

「むっふっふ。何故か、知りたいかね少年」

「いや、別にそこまで知りたくは……」

「お願いだから聞いてよー！」

初めからそう言えばいいのに回りくどいことをするな、この小動物は。

「で？ 何が原因なんだよ」

「何を隠そう、数日後には私の誕生日なのだよ！」

「……あゝ、そういえばそうだね！」

見る限り、つかさは本気で忘れていたようだ。

オレは……知らなかったからノーカンでことで。

しかし、コイツが今さら誕生日ごときでこんなに喜ぶか……？

「だってこれで堂々とエロゲできるじゃん？」

「エロゲ！？」

「お前いままでだって堂々としてたじゃん……」

「これで堂々と買えるんだよ」

買えないだろ。

……見た目的に。

こんなのが『エロゲください』って言っても絶対売ってもらえないな。

「失礼なこと、考えてません。ゴメンナサイ」……ホントかな」

「でも、誕生日だったらお祝いしないかね」

「そうなんだよネ。家でパーティするからつかさもおいでよ」

「うん！ 行くよ」

「ついでにかいと君も一緒に」

「オレはおまけか……？」

さっきの仕返しとばかりにニヤニヤ笑っている。

腹立つなこんにやろう。

しかし、誕生日か。

やっぱりプレゼントとか送った方が良いのか？

とりあえず今度の休み辺りにそこら辺の店でも見て回るか？

なんてことを考えていたら予鈴が鳴って一瞬吃驚したが。

休日。

いざ、外に出てみたもののこなたが何を欲しがっているのか分からない。

まあ誕生日プレゼントなんだから貰えれば嬉しいだろうがやはり欲しいものを貰えた方が倍嬉しいよな。

「でもオタグッズは流石に……」

ここはやはり無難に小物の類かな。

オレはそう思い商店街の方へ向かった。

『素通りだとおおおおおお！？』

何か叫び声が聞こえた気がするが気のせいだろう。

商店街のアクセサリーショップ。

入るときは若干の抵抗があったが別に普段からもつと偏見ありそう  
なところに入入りしてるから別にいいやと思いい中に入りたいが、  
種類がありすぎて分からない。

「というかオレは女子にプレゼントとかそういう類の経験ははつきり  
言って皆無だ。」

女子…… というかあなたは何を貰って喜ぶんだ？

「深く考えすぎるからいけないのかもな……」

別に誕生日プレゼントに男も女も関係ないだろう。

まあ最低限の境界はあるかもしれないが大抵はそんな感じだ。

「だったら簡単。オレが貰ってうれしいと思うものを渡せばいい。  
それだけだ。」

そう勝手に結論を出し、適当に店内を物色する。

ふとバンゲル系の棚に気になるものを見つけた。

様々な色の流れ星を象ったガラス細工付きのものだ。

青、緑、黄、桃、黒。

その5色が一際異彩を放っていた。

そつと手に取ると、なんだか懐かしいような、どこか悲しいような  
気分がした。

直感だった。

これが似合うと思った。

オレはそれら5つのバンゲルを棚から取り出すとレジへ向かい、  
青、緑、黄、桃の4つにラッピングをして貰い、黒はオレの手首へ

着けた。

他のヤツらの誕生日にもコレをあげよう。

こなたはきつと、青が似合う。

つかさは緑が合いそうだ。

かがみは黄色かな。

みゆきは桃だ。

そして、オレは黒だ。

みんな、喜んでくれるだろうか。

オレは後日に行われるこなたの誕生日に胸を膨らませつつ、帰路を急いだ。

なぜ、オレがアクセサリーを選んだと思う？

偶然？　あるいは必然？

恐らく後者だろう。

もう二度とあんな思いはしたくない、させたくないから。

これなら、きつとどこにも行かないだろう？

これだけを見たりなんか、しないはずだから……。

追いかけてりなんか、しないから……。

## 君が存在した奇跡

こなたの誕生日当日。

休みの日という事で、こなたは朝から出かけているらしい。

そんでそのままバイトに行ってから誕生日会、というスケジュールみたいだ。

ということで男手が必要、という感じでオレが駆り出されるわけだ。そうじろうさんがいるだろうに……。

とはいえ、仕事の×切が近づいていて流石に仕事を放棄するわけにはいかないのでオレがやる事になった。

×切直前にそんな事してていいのか……。

「お邪魔しまーす」

泉家の門をくぐる。

表には自転車が二台止まっていたのでかがみとつかさはいるのだろう。

「おつす。かいと君」

「かいと君、こんにちは」

「おう。準備の方はどうだ？」

「まあぼちぼちね」

居間はそこその装飾がなされているし、料理も下準備が大体できている。

「時間もまだまだあるし、これなら余裕だな」

袖を捲りあげ、キッチンの方へ立つ。

まあ、つかさ一人でもできるだろうが二人でやった方が早く終わって装飾もできるしな。

料理はこなたが好きそうなものばかり並んでいる。

油濃そうなものばかりだが誕生日くらいはこんな贅沢させてもいい

いだろう。

途中でみゆきや成美さん、出かけていた一年生組とも合流し着々と準備は進む。

誕生会一時間前で無駄にヒートアップした準備は終わった。そうじろうさんも何とか仕事を終えて居間へ集合。あとは主役を待つだけだ。

時計の針がちょうど7時を指した頃、ドアを開ける音がする。

「お、帰ってきたか」

「じゃ、みんな作戦通りに行くよー？」

成美さんの声にオレたちは無言で頷き、クラッカーを構える。

「ただいま『パンツ』！」　　って、うわ！」

流石に扉を開けていきなりのクラッカーはびっくりするな。

しかし、こなたはすぐに笑顔になる。

「誕生日おめでとう」

「こなたさん、おめでとうございます」

「こなちゃんおめでとう」

「いや、みんなありがとね」

こなたは柄にもなく照れている。

こなたのこんな顔が見ただけでも来た甲斐はあったよな。

その後も華々しい感じで誕生会は過ぎていく。

さて、御馳走も腹八分目にとどめたところで本丸の手作りケーキだ。つかさがこの日のために作ってきた大作。

家庭手作りでこそそこそ難しいんじゃないかな？的な2段ケーキだ。

見栄えもかなりいいし、いかにも店で売ってそうな感じのものだ。



てっぺんの所にろうそくを立てる。

部屋を真っ暗にするとうそくの明かりがあなたの顔を照らしている。

あなたは大きく息を吸い、ろうそくを一気に吹き消した。  
パチパチと拍手が起こる。

ケーキも完食し、いよいよプレゼントを渡す事になる。  
まずはつかさ。

「私はぬいぐるみ。本当はこれも手作りしたかったけど流石に時間がなくて」

どんだけ手の込んだ事してるんだよ……。

次はかがみ。

「私は、まあ無難にバッグとかね。アンタはこの前いい感じのが欲  
しいっていったから」

やっぱり細かいところについてくるな……。

次はみゆき。

「私は安眠用のCDです。こなたさん、最近寝不足のようでしたか  
ら」

みゆきは相変わらず気が利くな。

次の一年生グループ全員で出し合って買ったらしい。

「私達はお姉ちゃんにお洋服を買ってきました」

「ですが、その……」

小早川と岩崎は少しやりにくそう。

「いや、なかなか悩んだッスよ。泉先輩は選択肢が山ほどあるッ  
スから！」

「オカゲでコスプレショップで2ジカンもタツていましたネ！」  
いかん……コイツらの考えが手に取るように分かる……。

取り出されたのはどこかで見た事あるようなコスプレ一式。

「いや、コスプレはあんまり趣味じゃないけど嬉しいよ」  
「嬉しいんだ……」

ちなみに成美さんは奇妙なダンスを披露。  
そうじろっさんはあとで渡すと言っているがアブないものじゃない  
だろうな……。

「じゃー、かいと君は何をくれるのかな？」

こなたは手を伸ばしている。

貰う気満々か。

バッグからラッピングされた箱を取り出し、こなたに手渡す。

「さーて、何かな　バングルかあ」

「何だ？　期待はずれなのか……？」

「いんや、嬉しいよ」

こなたは早速手首にソレを着ける。

こなたはひとしきり満足したようだ。

「みんな、今日はありがとね」

「何よ、アンタらしくない」

「いやいや、私だってそれぐらいの常識は持つてるよ」

自分で半常識って言うてるように聞こえるんだが……。

でも、こなたが嬉しそうで良かったよ。

今日の事を糧に、また一緒に進んでいけたら……。

でも、幸せなんてそう長く続くもんじゃない。

それは、オレがいちばん分かっていた事だっただんだ……。

## 知らないハズの過去

6月を迎え、これでもかとかばかりのテスト尽くしにうんざりしているというのに迎えた中間テスト。

まあ、実力テストにくらべれば幾分手応えもあったし、まあいいだろう。

テストの翌々日。

すでに結果が張り出されていてまたもや掲示板の前には人の群れができている。

「今回も出遅れたなあ……」

「生徒がこんだけいるんだもの。見るのも大変なのにさらに探さなきゃならないしね」

毎度毎度こんなことに体力を使う自分が阿呆らしく思えてくるが仕方がない。

「お！ みゆきさん、今回は一位だよ！」

「ゆきちゃんスゴイー!!」

みゆきもなかなか嬉しいのか頬を染めている。

「スゴイじゃないか」

「いえ、そんな……」

その後、なんとか全員の順位を確認したがオレはなかなかの好成績だった。

かがみは少し落としたようだが相変わらず上位をキープ。

こなたはオレに次ぐ順位で、つかさも今回は頑張ったようだった。

「いや、テストも済んだしこれでやっとゆっくりできるな」

「ま、一ヶ月後にはすぐに期末があるけどね」

「もう嫌だなあ……。なんでこんなにテストばかり何だろう」

そりゃ、受験生だし。

一応、勉強が本分だしな。

なんて雑談をしていると一人の男子生徒がこちらに近づいてくる。

「やあ、高良さん」

「あ、三崎さん。こんにちは」

男子生徒は人のよさそうな笑みを浮かべている。

「今回は高良さんも頑張ったみたいだね。僕もそれなりに勉強したんだけど負けたよ」

「いいえ、いつもは三崎さんの方が点数も高いですし今回はたまたまです」

みゆきが普通に話してるって事は顔なじみか……。

「なあ、誰だアイツ」

「ああ、三崎君ね。いつもみゆきと上位争いしてるの」

ああ、そういえば前日も前々回も名前があった気がする。

「それに優しいしね。なんかギャルゲの親友的ポジションかな？」

「それは失礼だろ！」

「でも割と学校内でも有名だよね？ 生徒会もやってたし」  
ん…………。

あの三崎ってヤツには悪いがまったく分からない。

高2までは他人にとことん興味がなかったからな……。

「倉場君も久しぶりかな？」

「…………はあ？」

「覚えてない？ 小学校の頃一緒にクラスになっただろ？」

「スマンがまったく記憶にない。何年の時だ？」

「えーと、君が小六の時に転校していったから小五の時かな？」

小学五年の時か。

………… 思い出したくないな。

「ホントに悪いが記憶にない」

三崎は少し考える素振りを見せて口を開いた。

「ま、そうだろうね。あの頃の君は大変だっただろうから」  
「…………」

同じ小学校って事はあの事も知ってるのか。

……やりにくいな。

「そういえば、あの事件。あの頃の傷はもう癒えたのかい？」  
「っ！」

「ああ、また新しい子を見つけたのか」

「……やめろ」

「君ってホント懲りないよね」

「やめろつてのが聞こえないのか!？」

気付けばオレは大声で怒鳴っていた。

周りの生徒もオレを見ている。

クソッ！

あの三崎とか言うヤツ、嫌な感じがする。

こなた達は心配そうにオレたちを見ている。

「ま、君がどうしようと勝手だけどね。この次がどうなったって知らないから」

三崎はポン、とオレの肩を軽く叩いてそのまま通り過ぎていく。

「ああ、高良さん。次は期末テストでね」

「あ、はい……」

オレはしばらくそこに立っていた。

ぎゅっと拳を握る力を強める。

なんで、なんでアイツにあんな事言われなくちゃならない！

オレがどんな今を生きようと横から口を出す権利なんてない……

そう思っているのに、

なんで……

何でオレの思いは立ち止まるんだ！

苦しくなる。

肺が酸素を求める。

呼吸が荒くなる。

周りが見えなくなる。

自分が何をしているのかも、わからなくなる。

オレは……

「かいと君!？」

「!？」

「どうしたの？」

「何か変よ？」

つかさとかがみがオレの顔をのぞき込んでいる。

「べ、別に何でも……」

咄嗟にオレは顔をそらす。

オレは、このままで良かったのか……？

授業も終わり、家へとたどり着く。

今日はなんて日だ……。

結局あの後から授業なんて聞いていられなかったし、こなた達との会話もうわの空だった。

再び思考をめぐらせているとインターホンが鳴る。

「こなた？」

「うん。今、大丈夫？」

「あ、ああ……」

こなたにしてはいつになく真剣な顔だ。

「上がるか？」

「いや、ココでいいよ」

「そうか」

こなたはしばらく言葉を探していたようだが意を決したようにオレを見る。

「かいと君。今日、何か気になる事でもあった？」

「っ！」

いきなり、ピンポイントで当てられる。

確かに、何かはあった……。

「今日の三崎君の会話からおかしかった。それに三崎君との話、かいと君の過去の話でしょ？」

「……そうだ」

「教えてくれない？ 何があったのか」

正直言つて、迷う。

こなたが、こんなにも真剣にオレに頼んでいる。

それを断るなんてしたくない。

だけど、それがオレの過去の話だから……。

「確かに、私達はいいと君が話すまで待つて言った。でも、かいと君が過去の事で重荷を背負ってるなら何とかしてあげたいって思うよ!!」

こなたは、こんなにもオレを思ってくれていたのか……。

オレのために、ココまで……。

こなたの気持ちを重んじるなら、話すしかない。



例え、軽蔑されようと。

「 分かった。上がれよ。少し長くなるから」

オレは紅茶をこなたの前に置き、こなたの正面に座る。

「まあ、どこから話せばいいかな……」

あれは、

あの悪夢は、

オレが小学五年生の時だった……。

## 8年前

オレの家族は、父親、母親、オレ、妹の4人家族だった。

父親の仕事が上手くいってる事もあって金持ち、というわけではないがそこそこ裕福な家庭だった。

近所からの評判も良く、とても恵まれた環境の中にあつた。

妹の倉場しおんは病弱でよく入退院をくり返していた。

そして、オレと妹の親友、山宮しおん。

この2人は、当時のオレにとっての全ての存在だった。

悪夢の始まりは小五の年末の事。

大晦日と正月を家で過ごすために入院していた妹のしおんを迎えに行くついでに買い出しに行っていた時だった。

父さんと母さんに連れられてスーパーを後にした。

「お父さん、お母さん。しおん、きつと喜ぶね！」

「ええ。大好物を沢山作ってあげましょ」

「ああ。たまには豪勢にいかないと」

この時までは今まで通りだったんだ。

ふと目の前を見ると、一つのトラックが走っている。

それは、猛スピードでこちらへ近づいてくる。

あと5m。

もう逃げられない。

でも、父さんと母さんはオレを突き飛ばして、そのままオレの視界

から消えた。

「っ！ 父さん！？ 母さん！？」

オレは叫ぶ。

起きた状況がつかめなくて。

信じたくなくて。

でも、現実是不変ならない。

「父さん……母さん……！」

父さんも母さんも、そのまま二度と動かなかったのだ。

それから一ヶ月経った日、

その日は妹のしおんと面会できる日だった。

父さんと母さんの一件があつてから妹は体調をいつそう悪くして退院できぬまま年を越した。

「かいとくーん！ 病院行こうよー！！」

「ああ！ 今行くよ！」

外では親友のしおんが待っていた。

山宮しおんは、オレが小三の頃に引越してきて、家が隣、さらに妹と同名という偶然で仲が良くなった。

父さんと母さんが亡くなったが変わらず接してくれる彼女は当時のオレにとって心の支えでもあった。

「でも、大変だね。おじさんもおばさんも亡くなっちゃったし…

…」

「うん……。でも、今はばあちゃんもいるし、そこまで寂しくないかな」

「本当？」

山宮はそう言つてオレの顔をのぞき込んでくる。

「山宮には敵わないな」

「そりゃあ、2年も一緒にいるからネ」

「腐れ縁ってヤツ？」

「なんだとー！」

両親の事を乗り越える事ができたのも、彼女と妹のおかげだったかもしれない。

いや、きっと……そうだった。

「やーやー！ 元気かい、しおんちゃん！」

「山宮さん、こんにちは。お兄ちゃんもいらっしやい」

「おう」

妹は体調を崩したとは言ってもだいぶ元気そうだった。

「今日は起きてても大丈夫なのか？」

「うん。だいぶ咳も少ないし、頭も痛くないから」

そう言って笑う妹は本当に眩しかった。

「しおんちゃんも早く良くなるといいねー」

山宮はそう言って妹の頭を撫でる。

そうされると妹は、はにかむように笑うのだ。

面会の時間が過ぎ、一度家にもどる。

日に日に面会時間が少なくなっている事に不思議とオレは違和感を覚えなかった。

少し強風が吹き、山宮はぶるりと身震いする。

「寒っ！」

「そうだなあ。最近は天気も悪いし」

あの日は年が明けてから一度もお天道様を煽いでいなかった気がする。

それなのに山宮は帽子を被っているのだ。

ピンクと白のつば付き帽で、これはオレが去年、コイツの誕生日にあげたものだった。

「お前、いつもそれ被ってるよな。出かけるときはいつもじゃない

か？」

「そりゃ、かいと君が私にくれたプレゼントだからね」

この時のオレは、まだ彼女の言う事の意味が分からなかった。

そして、ココでさつきとは比べものにならない突風が巻き起こる。

そして、山宮の帽子は反対側の歩道へと落ちる。

「あ……」

「私の帽子！」

「山宮、ここで待ってる。オレが取ってくるから」

そう言つて、オレはガードレールを飛び越えた。

さつさと道路を横切り、落ちた帽子を拾う。

ついていた汚れを軽く払い、再びガードレールを飛び越えて道路を横切る。

「山宮ー、取れたぞ！」

「っ！ かいと君、戻ってえ！！」

「え？」

オレに突っ込んでくる黒い乗用車。

運転手の驚いた表情。

山宮がガードレールを飛び越える様子。

周りの大人達の状況。

それらが全て一瞬のような出来事で、

刹那、オレは衝撃を感じて気付けば、オレは地面に倒れていた。

乗用車の真横で。

血に濡れた帽子。

じわり、と地面を伝うソレはまさしく生命の死を物語るものだった。

「や、まみや……？」

いくら呼んでも、返事なんてあるワケがない。

でも、受け入れられなくて  
いつかの時みたいに起きあがって笑うんじゃないかって  
飛び出したオレを叱るんじゃないかって

そう、思いたかった。

正式にオレと妹の転校が決まった。

これ以上、あの家においても祖母が困るだけだったし祖母の家は田舎  
の方だから都会よりも空気が綺麗だし、妹の養生にいいと思ったか  
らだ。

山宮家の両親は

『仕方がなかった、あれは事故だった』と言い、オレを許した。

オレが、殺したようなもののに。

オレが飛び出さなければ済んだ話だったのに。

オレの身体は2つに裂かれたような痛みを覚えた。

悪夢はまだ、終わらなかった。

1年を終え、春休みに入った頃の事だった。

珍しく、体調が良かった妹が体力づくりをしたい、との事だった。  
近くの公園へ軽くジョギングをしながら行く。

「大丈夫か？」

「うん。まだ平気」

普段から元から運動が苦手という事もあり、すぐにバテていたがそ  
れでも妹は諦めなかった。

そんな事が何日か続いた日の事だった。

妹は公園の地面に座り込んでしまったのだ。

「お、おい。本当に大丈夫か？」

「う、うん。ちょっと疲れちゃっただけだから……」

肩で大きく息をする妹を見て、本当に具合が悪いようだと思った才  
レは、公園のベンチでしばらく寝かせていた。

病院内は騒然としていた。

その中でオレは、呆然と立ちつくしていた。

妹は病院へ搬送されたのだった。

祖母は何やら難しそうな話を医者としていた。

オレは全てを悟っていた。

妹も、もう長くないのだと。

妹の病気はオレが思っていたよりもかなり重いもので、かなり症状  
も悪化していたとの事だった。

『治療中』のランプが消え、医者は難しい顔つきで出てきた。

医者はふるふると首を横に振る。

祖母はその場に泣き崩れた。

オレは、ただそれを見ているしかできなかった。

ただ、オレの大事なものがなくなって、

消えていくのを見ていただけだったんだ……。

責めないで（前書き）

人間ドラマって難しいですね……。



## 責めないで

「以上がオレの過去だが、どうだ？」

こなたはオレの話を無言で聞いていた。

別にこなたがオレを軽蔑しようと突き放そうと縁を切ろうと構わなかった。

アイツがオレを拒絶するならそれまでだし、何をされようと、どんなことを言われようとオレに拒否する権利はない。

だけど、オレに浴びせられたのは罵倒でも蔑みでもなかった。

「辛かったんだね……」

「え……？」

こなたはそつとオレの手を取った。

優しく、暖かくて、安心して。

でも、

「それだけかよ……？」

「何が？」

「オレに何か、他に言う事があるんじゃないのか？」

「別にないよ。私から言う事はそれだけ」

信じられない答えだった。

オレはどんなことを言われてもいいはずだったのに。

コイツはそれをしなかった。

何故、許す？

「かいと君は、ずっとそのことを抱え込んで苦しんでたんだね……」

「オレは……守れなかったんだぞ！」

守りたいものを、守らなきゃいけなかった人達を……！」

何としても助けたかった。

例えこの身を投げ打つてでも助けなくちゃいけなかったのに。でも、こなたはふるふると首を振る。

「かいと君は偉いよ。辛いはずなのにそれを私達に見せないで」

「でも……！　オレは……！！」

「怖かったんだよね。……一人でいる事がずっと嫌なんだって。分かるよ、その気持ち」

こなたはそつとオレを抱きしめる。

暖かくて、柔らかくて、落ち着いて。

「オレはどうしようもなかったんだ……。逃げて、責任逃れして最低だよ……！」

「かいと君は悪くない。

私が知ってるのは、困ってる人は放っておけないお人好しでぶつきらぼうで、でも優しくて、

知り合つてまだ2ヶ月しか経ってないけど、それでもそれだけの事は分かる」

ああ……

「それが、私やかがみやつかさやみゆきさんが知ってるかいと君だよ」

こんなオレでも、まだ信じてくれる人がいたんだ。

それに気付かないで、過去ばかりふり返って、

真正面から見てやれなくて、受け止めてやれなくて。

オレは、どれだけの人達を不幸にしていたんだ。  
しっかりとオレを見てくれる人がいたのに。

父さん、母さん、山宮、しおん

オレは、アイツらと生きてもいいんだよな？

憑物が落ちたようにすっきりとした気分だった。  
こんなにも泣いたのは、久しぶりかもしれない。

いつか、分かれる日まで。  
一緒にいられるときまで、大切な仲間たちと  
素敵な思い出を残せたら  
。

オレが望んでいたのは、たったそれだけの事だったんだ。

「ありがとうな、こなた。おかげですっきりしたよ」

「いや、私も意外な顔が見れて良かったよ」

「雰囲気ぶち壊したな」

玄関先でこなたを見送る。

このことも、またいつか他のヤツらにも伝えなきゃならない。  
でも、もう辛い。

ふと携帯がコールしているのに気付く。

モニタには『かがみ』と表示されている。

「もしもし？　かがみ？」

『やあ。気分はどうだい、倉場君？』

「！？」

気に障る声。

オレを苛立たせる声。

間違いない。“三崎しんや”だ。

「何の用だ？　そもそもなんでお前がかがみの携帯から……まさか！？」

『んゝ、どうだろね。御想像にお任せするよ』

「テメエ、今どこに！」

こなたはオレの動揺する様子を心配そうに見ていた。

『公園にいるんだ。来たければ来ればいい』

そう言つて三崎は電話を切った。

くそ！

オレは鍵をかけて自転車にまたがる。

「かいと君、どこ行くの！？」

「公園！　こなたも行くぞ！！」

こなたも止めてあつた自転車にまたがり、急いで自転車をこぐ。

早く、早く行かないと　　っ！！

## 過去の真実

「かがみ!!」

日が落ちた公園は既に誰もいない。

いや、オレを含めて6人のみがいた。

公園の真ん中のベンチ。

そこにかがみ、つかさ、みゆきは座っていた。

三崎はその前に立ち、相も変わらず腹の立つ笑みを浮かべていた。

「無事、だったか……」

オレは安堵し、地面に座り込む。

でも、様子が違う事に気付く。

誰一人、何も話そうとしないのだ。

かがみは、何とも言えなそうな顔でオレを見ている。

つかさは、オロオロとオレと三崎を交互に見ている。

みゆきは、申し訳なさそうな顔をしている。

「お前……!」

「そうかつかしいでくれよ。そこまで細かい事は話さない。せいぜい一般に明かされた情報を公開した程度だよ」

三崎は身体の向きをオレの方へと向ける。

街灯が少しずつ公園内を照らし始める。

「お前は、何がしたいんだよ! オレにどうして欲しいんだ!？」

コイツを見ていると嫌な感じがする。

何か、オレの直感が「関わるな」と言っているようで。

三崎は顎に手を当て、考える仕草を取る。

「強いて言うなら『復讐』かな?」

「復讐……だと? 意味の分からない事ばかりぬかしやがって

! いい加減に」

オレは三崎へ掴みかかる。

だが、三崎はオレの腕を握り、力を強める。

「放せよ。その糞みてえな手で触るんじゃない」

声色が変わった。

今まで人をおちよくるような声が一変して、低い声に変わる。

「っ！」

「分かるわけないよなあ。

今まで何も知らずにのうのうと生きてきたお前に俺の何が分かると思う？」

オレは三崎の手を振り払う。

握られていたところがズキズキと痛んだ。

「何が……何の恨みがあるんだ!？」

「俺の人生全ての恨みだよ。

お前のせいで俺は最低な生活を送ってきたんだからな」

三崎は大きな溜息を吐くと話し始めた。

「俺の父は運送業者に勤めていた。

母親を早くに亡くした俺を寂しい思いをさせまいといっそう可愛がられた。

そして、俺もそんな父が大好きだったんだ……。

でも、事件は起こった。

年末を迎えた日。父さんはいつものように仕事をしていた。

父さんに乗せたトラックはいきなり走り出し、ブレーキも効かないままお前の両親を轢き殺した」

「!」

あの事件の運転手が、三崎の父親だったのか……？

「世間は、俺達家族を悪者に仕立て上げた。

会社はトラックに不備はなかったと嘘を吐き、罪を全て父になすりつけた。

そして、お前達のせいで父は夜な夜な酒におぼれては俺に暴力を振るった。

それでも、いつか元の父に戻ってくれる事を信じた……。

それなのに……父はとうとう入院した。

心労と酒の飲み過ぎがたたったんだ。いつ退院できるかも分からない」

オレも、こなた達も驚きを隠せなかった。

「それを滅茶苦茶にされた俺の気持ちが、分かるのか!？」

あの時はまでは幸せな家族でいられたのに!!」

今度は逆に三崎がオレに掴みかかる。

「この……っ!」

でも、振りほどけない。

まるで、オレへの憎しみがそのまま力になっているようだった。

「もうやめてえっ!!!!」

つかさは、叫んだ。

「つかさ……」

「もう許してあげてよ!

かいと君も家族や友達がいなくなつて寂しいんだよ! 悲しいんだよ!

もう責めないであげて!!」

つかさはそう言って泣き出した。

「そうよ! アンタがどんな事情があつたって辛いのはかいと君も一緒なのよ!!」

「かがみ……」

「お二人の言うとおりです。

理由がどうであれ、一方的にぶつかっているだけでは何も解決しま

せん!!」

「みゆき……」

「そうだよ! かいと君が今までどんな思いでいたか分からないのに自分の気持ちばかり押しつけて! そんなの良くないよ!!」

「こなた……」

みんな、オレを庇ってくれている。

三崎は、その顔を憤怒で染める。

「五月蠅いんだよ!

何も知らない、甘々な環境で育ったお前らに分かるわけがないだろうがっ!!」

三崎はオレから手を離し、こなた達に殴りかかる。

ガッ!

オレは三崎の拳を受け止める。

「オレの大事なヤツらを傷つけるのなら、許さない!」

三崎は変わらない表情でオレを睨む。

「黙れ! 何も学習しないこの糞野郎が!

どうせそいつ等も殺すんだろ! 昔のように!!」

「殺さない! 死なせない!

昔のオレは何も守れなかった、だからこそ今度こそは守るんだ!!」

こなたに教えて貰った事、

オレが、いかにコイツらに支えられていたか。

過去をふり返ってばかりではいけない。

いつか、前を見なくちゃいけないんだ。

「だから、テメエもさっさと前を見やがれ!

お前はオレと違って、親父がまだ生きてるんだろっが!!!!」

三崎はその言葉に力を緩める。



「親父が起きたときに、頑張ったって言って貰えるじゃねえか……！」

「父さんに……」

「お前は、オレと違うんだから……」

三崎は完全に力を抜き、項垂れる。

「行くぞ……！」

オレは他のヤツらを連れて、公園を後にした。

## 自宅

一度、落ち着いて話をしたかったオレは4人を家に招いた。

「……済まなかった。隠してた事には謝る」

オレの言葉にかがみはお茶を一啜りして

「もういいわよ。内容からして十分言いにくい事だったろうし」

つかさも

「大変だったね。何もしてあげられなくてゴメンね」

みゆきも

「事情が事情ですし、聞かれたくない事だってありますからね」

みんな、オレを許した。

「ね？ 私の言うとおりだったデシヨ？」

「言うとおり？」

かがみは疑問符を浮かべる。

「私がかがみ達より一足早く聞いていたのです！」

こなたはGJ！のサインを出す。

「アンタはいつも唐突に……！」

「あだだ！ こめかみは洒落になんないって……！」

「こなちゃん面白いね」

「かがみさん、それくらいにしておいた方が……」

そうだ、

これが、オレの望んでいた未来だったんだ。

オレの望むものはとくに手の中にあっただのか……。

## 金曜労働賞（前書き）

やっぱり日常の方が書きやすいですね。

## 金曜労働賞

三崎の事件から数日経ち、すっかり日常を取りもどした。家の鍵を開け、鞆を放る。

「少し腹減ったな……」

今日は色々あつて昼食はパン一個だけだったからな。

「なんか材料になるもんは……て材料きれてんじゃん……」  
そうだった。

確か昨日に全部使い切ったんだった。

「しょうがない。買い出しに行くか」

そう思い、財布を取り出すが……

金がない。

はあ、銀行に行くのも先延ばしにしてたっけ……。

買い出しに行く前に銀行に寄らないと

「そういう事が……」

残高辛うじて3桁。

「っっっ！　そうか、こなたの誕生日プレゼント＋　に金を使ってたか」

オレは頭を抱える。

仕送りは2月に一度。

今月に仕送りがあるが、この残金で生き残れるのか……？

……無理だな。

でも、どうすればいいんだ？

まだオレの歳ではそんな一流の職なんて……

「そうか！　なにも一流じゃなくてもいいんだ！」



「うわっ！」

一人の男が突っ込んでくる。

ギリギリで避けたらその男は向かいの店の壁に激突した。  
どんだけ威力ついてるんだ……？

男はのそりと立ち上がり、オレを見る。

「なかなかやるじゃないか」

「何もしてませんけど……」

どうでもいいけど、スゴイ劇画調な外見してるな。

別世界の住人みたいな。

「少年！ オレはアニメ店長の兄沢命斗だ！ 何かをお探しのよう  
だなー！」

「まあ、ある意味探してますけど」  
バイトを。

「ふふふ。分かっているぞ！ 少年が求めているのは、浪漫！ そ  
うだな？」

「いえ、金になりそうなバイトを探してます」

『なんだってえ………！！』

いちいち叫ぶな。ウザイ。

とにかくこの木偶の坊そうな男はアテにならないな。  
普通に話のできそうなのは……

劇画調な男性

劇画調な女性×2

見た目普通そうな女性。

アレしか話にならなそうだ。

「あのー、ちょっといいですか？」

「はいー。何ですかあ？」

ちょっと喋り方は気が抜けてるが何とか話はできそうだ。

この店にはもう少しまともな人材が欲しいところだな。

「バイトしたいんですけど……」

「ああ、バイトの子ですねえ。」

でしたらあゝ、店長から面接を受けてください」

「はあ……」

この店はホントに大丈夫なのだろうか……。

面接を受ける前から不安たつぷりな感じた……。

## 面接会場

とりあえず言われたとおり、部屋でイスに座って待っている。  
いつまで待たせるんだ店長は。

『ガチャ!!』

ドアが開く。

にしてもドアの開け方荒いな。

「君がバイト志望の子だな!!」

あ、コイツ店長だったんだ。

そっいえば店長って言ってたような……。

どうでもいいか。

「さて、では自己紹介をして貰おう!!」

「はあ……。えーと、倉場かいと、18歳です」

「趣味は!!」

「アニメ鑑賞とかゲームです」

「特技!!」

「特技らしいものは何も……」

「よし! 合格だ!!」

「早あ！」

早すぎる……。

本当に大丈夫だろうか……。

「では、明日からよろしく頼むぞ！」

「あー……よろしく願います」

だが、生活費を稼ぐためには仕方がない……か。



## 掛け持ち

「これをこうして……と」

いまだに少し着慣れない制服を着る。

アニメイトでバイトを始めて4日。

仕事といっても簡単なもので倉庫から本を出して並べたり、店内を掃除したりするだけだ。

ま、始めてこんだけじゃそんなもんか……。

とりあえず、時間も惜しいので店内へ出る。

「ひなたさん、こんにちは」

「あら、倉場君。こんにちは」

オレの担当の“宮河ひなた”さん。

少々気の抜けた喋り方をする人だが、実はいくつものバイトを掛け持つスゴイ人だ。

なんでも、貧乏な家をなんとかそのバイトで生計を立てて妹を養っているらしい。

ここだけ聞けば割といい話に聞こえるのだが、散財原因もこの人らしい。

バイトの帰りにオタグッズを購入しまくっているみたいでなかなか家計が潤わないみたいだ。

「これをこっちに運べばいいんですよね？」

「お願いね。そっちが終わったら次はこっちもお願いできるかしら？」

「分かりました」

新入荷の本を手際よく並べる。

古い本は普通のスペースに置く。

単純な仕事だが本の量が多いので結構な重労働だ。

「すいません。のコミックってどこですかね？」

一人の少女がオレに声をかける。

「ああ。それでしたら……ってえ!!」

長すぎる髪

みよんとでたアホ毛

ちっさい身長

ぺたんこな胸

「こなた!」

「あれ? かいと君じゃん。どしたの?」

「いやゝ、かくかくしかじかで」

今までの経緯を八文字で説明したところでこなたの求めているコミックの所へ案内する。

「そつかゝ。かいと君もとうとう労働者になったかあゝ」

「まあ、確かにゆっくりできる時間は少なくなったけど、四の五の言ってる場合じゃないだろ」

「そだねえ」

確かにバイトを始める前に少し給料をいただいたがアレでも結構厭しいのが現状だ。

「掛け持ちとかどうかな?」

「は?」

こなたは唐突にそう言った。

「掛け持ちなら収入も上がるでしょ? 私がいいところ紹介するよ

ゝ

「マジでか!」

「モチのロンさ!」

こなたはビシッと親指を立てる。

翌日

「ここは……」

看板には『コスプレ喫茶』と書かれている。  
そういう事か。

「ささ、入って入って」

こなたに文字通り背中を押されて入店する。

「やふ、店長」

「おお。その子が例の子かい？」

「そうですよ。なかなかハイスペックでしょ？」

「なかなかだな」

二人してこそこそ話している。

なんか悪寒が……。

「さ、とりあえず面接しようか」

「は、はあ……」

面接中

アニメイトの時とまったく同じシチュエーションの面接をされた。

ほんの4、5個の質問に答えただけで合格した。

ホントに大丈夫なのだろうか。アキバの経営は……。

「じゃあ、さつそくやろうか」

「いきなりかよ！」

「いいじゃん。店長が今日から出てくれたらお給料アップするって言うてるんだよ？」

人間とは金に貪欲だな。

オレも例外じゃないわけで。

「コレを着るのか……？」

見た感じ、モロコスプレな衣装。

「今日は騎士<sup>ナイト</sup>デーだからね。ちなみに私はコレ」

こなたはくるりと一回転する。

どっちかって言うところ騎士というか剣士（セバー）だけど。

まあいいか。

受けた仕事は責任持ってやろう。

オレは少し重い衣装を持って更衣室へ入る。

数分後、

「こんなもんか？」

「うんうん。やっぱり私の目に狂いはなかったね」

「なんだそら」

こなたは勝手に一人で満足げな顔をしている。

持っているときはアレだったが実際に着るとかなり重いし暑い。

空気が抜けるところがほとんど無いから熱気がこもる。

「じゃー、かいと君。早速お仕事ね。」

3番テーブルの人から注文聞いてきてね」

「は！？」

まさかの接客<sup>ホール</sup>だった。

「ちょー！いきなりすぎるって！」

「だいじょーぶ！何事も経験だよー！！」

こなたに控え室から押し出されて仕方なく指定のテーブルへ。

客は女性2人組。

「えと、ご注文はお決まりでしょうか？」

「それじゃあ、オレンジジュースとメロンソーダを」

「あとショートケーキ2つ」

「りよ、了解です！」

接客業って結構疲れるんだな……。

とりあえず、厨房へ注文の旨を伝えて控え室に戻る。

「いや、なかなかだったよ！」

「ったく……。無駄に緊張した……」

開放感と変な達成感、そしてこれからの不安を感じながら時間は過ぎていくのだった。

## 迎える日

無事に6月を終え、何とか生き残ったオレに届いたのは柊姉妹の誕生日の話だった。

「というわけで、7月7日はかがみとつかさの誕生日なのだよ」

「へえ。そうなのか」

「ですから、こなたさんと同じようにお二人の誕生パーティを思っています」

そうか。

こなたの時はだいぶ大変な思いをしたが既にプレゼントも買っているし、あの時ほどは慌てなくて済むだろう。

「場所はいかがみ達の家でやるから遅れないようにしてね」

「お前が言うか！」

そうオレが叫んだと同時にチャイムが鳴り、各々の席へ戻っていた。

その日の授業も終わり放課後。

「おっす」。帰りましょ」

かがみと合流し、教室を出る。

私立校で金があるため、教室内は冷暖房完備だが流石に廊下はそういった設備はなく教室を出た瞬間に嫌な熱気がまとわりつく。

「うわ、暑っ！」

こなたは既に汗をかいている。

オレは鞆から下敷きを取り出してぱたと煽ぐ。

「暑いな……。この分じゃ夏休みなんかもつと暑くなるんじゃないか？」

「そうですね。今年は例年にない猛暑と言われてますから」

これも地球温暖化の影響だろうか。

「それにしたってこう暑いとやってらんないわよね……」

「そうだね。私なんて教室からトイレに行くのもおっくうになっちゃって……」

なんて雑談をしながら駅まで向かう。

「じゃあ、オレとこなたはバイトがあるから」

「「「またね」」」

ちょうど着いた車両に乗り込み、アキバを目指す。

「ハロー、こなた、かいと。おフタリともハヤいですネ」

「おっすパトリシア」

「パティ、やふ」

後日知ったことだったが、パトリシアもこのバイトだったらしい。オレと同じくまだバイトを始めて日が浅いみたいだから何かと同じ場所で働く事が多かった。

「今日の衣装は？」

「えーと、今日はメイド&執事だからかいと君はこれね」

「はいよ」

黒の衣装を渡されて更衣室で着替える。

数分後

「こなた、これは？」

「メイド服だよ？」

「見れば分かるわ！」

オレが身につけているのは黒いフリフリのメイド服。  
なんでこんなもの着させられているんだ？

「いや、かがみ達に今度見せようかと」

こなたはそう言って携帯でオレを撮る。

「や、やめる！ 撮るんじゃない！」

「ダイジョーブ！ かいとはジューヨウもバッチリあるネ！」

「嬉しくねえ　！！」

本当に嬉しくなかった。

店も閉店の時間を迎える。

後かたづけ等をしていると店長がオレに話しかける。

「ちよつといいかな？」

「あ、はい」

何事かと思ったオレだが店長の表情は割と軽いのでそれほど重大な事じゃないだろう。

「7月7日んだけど少し出てくれるかな？　少し店員が少なくてね」

「7月7日ですか……」

かがみとつかさの誕生日の日か……。

幸い休みの日だし、パーティも夕方からだ。

少し遅くてもなんとかなるかな……。

「分かりました。5時半くらいまでならなんとか」

「そうか。助かるよ」

始めたばかりで断るわけにもいかないし、仕方がないよな。

オレはそう思い、残りの片づけを始めた。

嫌なフラグが立った気がするがあえて言わないでおこう。



## 間に合いたい

かがみとつかさの誕生日当日。

朝早くに家を出てバイト先へ向かう。

「おはようございま〜す」

「やあ、おはよう」

「うっす」

店長に挨拶し、早速更衣室へ向かう。

何とか間に合えばいいんだけどな

こうしてバイトの時間は過ぎ……

とつくに7時。

「やばい！」

オレは店長に用事がある旨を伝えてすぐに店を出た。

「マジかよ……！」

オレはがっくりと頂垂れる。

『現在、人身事故のため運行を停止させて頂いております。大変ご迷惑を』  
㊦

流れるアナウンスの情報にがっくりと膝をつきたくなる思いだった。  
人身事故のため運休。

恐らく処理には相当時間がかかる。今日はもう出ないだろう。

「くそ！　なんでこう上手くいかないんだ！」

オレは力任せに近くの壁を殴った。

……やるしかない。

かがみ達にプレゼントを渡すため、アイツらに『おめでとう』と言ってやるために。

どのみち家に帰るにはやらなくちゃいけない事なんだ。

「走るか……」

オレは駅を出ると全力疾走でかがみ達の自宅を目指したのだった。

かがみ side

パーティが始まる時間になってもかいと君の姿は見えなかった。

どっかで足止め食ってる？

それとも事故？

時間が過ぎると共にそんな不安がよぎる。

「かがみくん。どしたの？」

「何でもないわよ。あとかがみん言うな」

「かいと君が来ないから落ち着かないんでしょう？」

こなたは嫌な笑顔で私を見ている。

「んなつ！ べ、別にそんなこと思っていないわよ！」

「『別にあいつの事なんて何とも思っていないんだからね！』って言うて？」

「うっさいわ！」

でも、こなたの言う事も当たらずも遠からずってトコだったかも。いくら待っても、彼の姿は見えなかった。

かいと side

オレは夜の街をとにかく脇目もふらずに突っ走っていた。

肺が酸素を欲しがっている。

オレの足が限界だと叫んでいる。

でも、そんなことはどうでもいい。

ただ、今日が終わる日までにアイツらに『おめでとう』と、直接会

って言いたかった。  
それだけがオレの中にあつた。

「はっ……はっ……」

ようやく柊家が見えた。

だが既に時刻は11時を過ぎるところかもつすぐ12時になりそう  
だ。

間に合わなかったか……。

オレはそう思い、踵を帰して自宅を目指す。

「遅いわよ!」

「え……?」

オレはゆっくりと振り向く。

かがみはいつの間にか玄関の前に立っていた。  
少し、瞳が濡れているようだった。

「遅いわよ、バカ!」

「ん、ごめん」

オレはかがみにそつと歩み寄る。

「バイトが長引いてさ、電車も止まってて」

「いい訳なんて聞かないわよ!」

かがみはそう言つてそっぽ向いてしまった。

「ごめん。心配かけたな」

「心配なんて……」

かがみはそこまで言つと、声を押しとどめた。

「それから、誕生日おめでとう」

かがみはその言葉に赤面し、俯いた。

拳がわなわなと震えている。

……殴られるか?

殴られてもいい。  
そう思った。

でも、ぶつかったのは  
かがみの身体だった。

「かがみ……？」

「心配したんだから……！」  
かがみの声は震えていた。  
泣いているのだろう。

「ごめん。ホントにごめんな」

オレはそう言っただけでかがみの後頭部をそつと撫でてやる。

「かがみ。オレからのプレゼント、受け取ってくれるか？」

かがみはオレの腕の中でゆっくりと頷いた。

かがみに似合うと思った黄色の星のブレスレット。

ラッピングされた箱をバッグから取り出してかがみに手渡す。

「つかさにも渡したいんだけど、家に入れて貰えるか？」

かがみは声もなく頷く。目元を擦っているところを見るとまだ泣いているのだろう。

『TSUKASA』とプレートのかかったドアを開ける。

つかさはベッドですうつと寝息を立てていた。

オレは枕元にそつと座り、軽く撫でてやる。

「つかさ。パーティ、出なくてごめんな」

オレはバッグから緑の星のブレスレットの箱を取り出して枕元に置く。

「つかさ、誕生日おめでとう」

オレはそつと呟いた。

つかさが一瞬、笑顔になった気がしたが気のせいとしておこつ。



間に合いたい（後書き）

地震のニュースが多いですね……  
とにかく今は無事を祈るのみです……

海へ…

かがみ&つかさの誕生日も終えてしばらくしての事。

「てなわけで、明日から夏休みや！ 楽しむのはええけど宿題もきっちりするんやで！」

と、すっかり念押しして黒井先生のありがた〜いお話は終わった。

今日は終業式で明日から夏休み。

これではばらくはゆつく

「ねーねー、かいと君。海行かない？」

ゆつくりできないみたいだ。

「海？」

とりあえず聞き返す。

「そう、海」

「なんでまた？」

こなたは「ぬつふつ」と笑うと叫んだ。

「それは夏休みといえば海！ ラブコメといえば海イベントは外せないからだよ！！」

「いつからこの世界はラブコメワールドになったんだ！」

少なくともここは現実世界だ。

（ちえ……。相変わらず鈍感だなあ）

「？」

こなたが何か呟いた気がするが気のせいかな？

「というわけで海行こうよ！」

「分かったよ……」

ま、今の内に思い出を作っておくのも悪くないだろう。

当日！

「アイツは例の如く遅刻か」

「そこら辺はもう期待しちゃダメよ……」

オレとかがみは揃って頭を押さえた。

だいたい集合場所がこなたの家の前なのに遅刻するってどういう事だ。

今現在集まっているのは、オレ、かがみ、つかさ、みゆき、小早川、岩崎、黒井先生、成実さんだ。

「やふ」。お待たせ」

「「遅い!!」」

オレとかがみは即座に突っ込む。

「たく……。小早川はちゃんと待ってるのにお前は何をしてたんだよ……」

「いや、ネットゲで限定クエやってたから!」

お前ってヤツは!

「なんて羨ましい事を! 何を狩ってやがった!」

「はいはい。アンタまでボケるな」

かがみさん、速攻で突っ込む。

「にしても、小早川や岩崎も一緒だったんだな。や、別に悪くないけどさ」

「だって今日はおとーさんがいるし」

「は? 別にいいだろ?」

「だから、おとーさんがいるんだよ」

「……ああ」

「そういうことね」

つかさもみゆきも苦笑だ。

ていうか分かってしまうあたり、ダメな気がするが。

その頃、そうじろう

「やべー、超つまらん……」



「さて、オレは黒井先生の車に乗せて貰うか」

前に成美さんの運転を見たがアレはもう無理だ。

あんなのに何時間も揺られるなんて耐えられそうにない。

「んじゃ、私も黒井先生の方で」

「私もお願いします」

「ゆたかが乗るなら私も……」

黒井先生の車にはオレ、こなた、小早川、岩崎が乗り、

成美さんの方にはかがみ、つかさ、みゆきが乗る。

まずは、成美さんの車が出発した。

「死ぬなよ……」

オレは先に逝く盟友達に敬礼した。

「じゃ、オレらはゆったり車旅でも楽しんだ……」

数分後、行き止まり。

数十分後、どこかのグラウンド。

道を間違えるわ、戻れなくなるわで立ち往生。

（くそ！ どっちもハズレだったか！）

更に数十分後、

「いい眺めだな……」

「そうですね……」

「……」

オレ達は街を一望できる丘の上にいた。

小早川も岩崎も苦笑気味だ。

「ななこさんって、運転上手だよね……」

「は？」

こなたは柵に腕を置き、街を見る。

「こなたね、車に乗ると酔っちゃうんだ……」。

だからね、酔い止めの薬持って来てるんだけど、ななこさんの運転だと全然気持ち悪くならなかったよ」

こなたはそう言って黒井先生の方を見た。

「泉……って！ この状況でつつこんどる余裕ないわ!!」

先生はそう叫ぶと再び地図に目を落とした。

数時間後……

海水は夕日の光を受けてオレンジ色になっていた。

寄せては返し、波の音だけが響く。

オレ達はそんな海を呆然と見ていた。（黒井先生＆成美さん除く）

ちなみにかがみ、つかさ、みゆきの3人は青ざめた顔だ。

その事に関しては首を突っ込まないでおく。

不意に成美さんと黒井先生が口を開く。

「さて……」

「旅館でも探そか」

ちなみにこの発言については突っ込む気すらおきなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2575p/>

---

らき すた オレと愉快的仲間たち～旅立ちの日へ～

2011年10月6日15時04分発行